The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	成化本『白兎記』譯註稿（二）
Author(s)	小林, 春代; 高橋, 文治; 谷口, 高志 他
Citation	中国研究集刊. 2004, 35, p. 84-138
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61080
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　雲号（総三十五号）平成十六年六月　八四―一三八頁

成化本『白兎記』譯註稿（二）

加藤　聰　小林春代　高橋文治　谷口高志
冨永鉄平　西尾　俊　藤原祐子

本稿は、本誌調號（總三二號、二〇〇三年六月）に掲載された「成化本『白兎記』譯註稿（一）」の續編（第五出途中より第九出途中まで）である。凡例については、前稿を參照いただきたい。なお譯註作成にあたって、本稿より、江蘇廣陵古籍刻印社校補『成化新編劉知遠還鄉白兎記』（江蘇廣陵古籍刻印社、一九八〇。以下、「江本」と略稱する）も參照した。

淨上云　一年之計在於春。一日之計在於寅。一時之計在於勤。我是李員外長子兒男。家裏赤的金、白的銀、（班班）（斑斑）點點玳瑁、（西）（犀）牛頭上角、大象口中牙、零（零）（陵）香藁薦、沈香獲梯、瑪瑙砌地、脚盆喫飯、馬子端湯。我們家老子有張沒志、賽願賽願、招了一箇劉知遠來家。老鐵也精光棍。叫他務農耕田、俱也不會、每日家領着年作的人、在那稻場上嗂唱打拳爲活。明日一拳兩脚、打殺一箇、他便走了、拿住我們頂缸。我不兎莊前莊後尋他一遭、我尋着他就踢就打。就是我們娘老子來勸、連他一頓。衆哥們、打爺罵娘、教（道）（導）父母。（堪堪）（湛湛）青天不可欺、（尤）（人）心難比水長流、烏江不是無（舡）（船）渡、一夜夫妻百夜恩。生做打呼科　會會。（淨云）撞王兒、那裏雷響。擡了井、收了瓦。只怕雨大奪濕了。唱　那裏這們雷響。敢是天雷、敢是地雷、都不是也。哎、這是中雷兒也。我是纔方罵了我娘老子兩句、這雷敢打我麼、打着了不曾。唱　打着了。還有人哩。且住（的）。上高坡上。那里那里。失火了。我去救一救。呸呸。不是火。卻元來正是這等光棍。就打。做打科　外上白　自不整衣毛。何須夜夜（等）（號）。你如

何在此鬧鬧炒炒。你打他怎的。淨云 趕出去。我莊農人家、鋤田(扒)(耙)(籠)(壟)、秋收冬藏、我要他做甚、終日打拳爲活。外白 賊畜生、你靠後、聽我說。他不是以下人家、他父親與我一面之交。

註 ○一年之計在於春一日之計在於寅一時之計在於勤—成語。宋・周孚『蠹齋鉛刀編』卷三〇「勸農文」に「一日之計在寅、一歲之計在春」、元刊本『事林廣記』乙集卷上「人事類」「警世格言」「應世警語」の條に「一日之計在於寅、一年之計在於春」、宛委山堂本『說郛』弓七〇所引『女論語』「營家章」に「一生之計惟在于勤、一年之計惟在于春、一日之計惟在于晨」とある。○家裏赤的金……馬子端湯—「金」「銀」、「瑁」「角(ここでは非入聲音)」、「梯」「地」、「飯」「湯」と押韻する一種の韻文。戲曲・小說に見られる、金持ちの暮らしをいう際の常套表現。『水滸傳』第二四回に「家裏錢過北斗、米爛成倉、赤的是金、白的是銀、圓的是珠、光的是寶、也有犀牛頭上角、亦有大象口中牙」、『醒世恆言』卷三一「鄭節使立功神臂弓」に「家中有赤金白銀、斑點玳瑁、鶻輪珍珠、犀牛頭上角、大象口中牙」とある。「零陵香」は香草の名。また、「獲梯」の「獲」字について、江本は誤字と疑うが、『聊齋志異』卷四「驅怪」に「護梯(てすりのある階段)」の語が見え、或いは「護」の誤りかもしれない。　○老子—ここでは家長を指して「老子」という。(宋元)參照。　○有張沒志—「張志(致)(體裁を作る)」に「有」と「沒」が付いたもので、「張致不張致」と同意。格好をつけるのなんのって、の意。『野叟曝言』第一七回に「我的怪道連日素娥有張沒智、早晚見我到跟前、只顧把眼偸睃」とある。　○老鐵也精光棍—未詳。ここでは、「老鐵」は「硬」を導く一種の歇後語、また「硬」は「棍」の縁語と解釋し、全體を「老鐵也似精光棍」の意として譯をつけた。　○每日家—「家」は時間副詞を作る助辭。前稿第五出「日家」の註參照。　○頂缸—身代り、の意。(宋元)參照。　○連他一頓—江本はこの後に一字の脫落があるとする。　○衆哥們—ここにいう「衆哥們」が誰を指すかよく解らない。ここでは、淨が舞台裏に向かって村の仲間に呼びかけるもの、と解した。　○(堪堪)(湛湛)青天不可欺……一夜夫婦百夜恩—この四句は、一句ずつがそれぞれ別々の成語。全體としてどのような意味を形成するのかよく解らない。成化本『白兎記』第三二葉bでも、この四句が同樣の並び方で用いられている。なお、「尤心」を江本・兪本は「憂心」に校訂するが、第三二葉bでは「人心」に作られており、「人心難比水長流」が人の心の變わりやすいことをいう成語である以上、「尤」は「人」の字形による誤りとすべきではあるまいか。また、「烏江不是無船渡」は宋・周密『齊東野語』卷二〇「隱語」の條にも見え、歇後語の可能性がある。　○會會(淨云)—江本・兪本は「會會」を「噲噲」に校訂する。直前に「生做打呼科」とあり、直後にも

「那裏雷響」とあるので、ここでは「會會」をいびきの音とし、更に「淨云」のト書きを補った。なお、いびきの音を表して『世説新語』「雅量篇」は「上牀便哈臺大鼾」という。「會會」は、あるいはこの「哈臺」が轉じたものかもしれない。　○奪濕―「奪」は、「淹」「弄」等の誤りかもしれない。ここでは「弄濕」の意と解して譯をつけた。　○嚨　那裏這們雷響―「嚨」は、恐らく雷の音を表し、「籠」ないし「瓏」の一聲の轉であろう（「籠」「瓏」が太鼓・銅鑼の音を表すことについては、清・胡文英『吳下方言考』卷一參照）。ここでは樂屋裏で音を出すものと考え、ト書きとした。後文の「嚨打着了」の「嚨」についても、同樣にト書きとみなした。また、「這們」の「們」は「麼」の一聲の轉。　○這雷敢打我―『論衡』「雷虛篇」は、「盛夏の時、雷電迅疾にして、樹木を擊折し、室屋を壞敗し、時に人を犯殺す。世俗以爲えらく、樹木を擊折し、室屋を壞敗するは、天龍を取ればなり、と。其の人を犯殺するや、之れを陰過ありと謂えり」という。雷が惡人を殺すという俗信は漢代にすでにあったようであるが、ただし、白話文學等によく見られる、雷が不孝者をうち殺すという話柄は、經書等の古典的文獻に言及を見ない。　○且住(的)―「的」は江本がすでに衍字とする。○自不整衣毛何須夜夜(等)(號)―常語。汲本第一〇出、『尋親記』第三二出等に「自不整衣毛、何須夜夜號」とあり（「號」は「嚎」にも作る）、それに從って校訂した。大騷ぎしているところに人が登場する場合の登場詩であろう。この常語は、元來、蝙蝠の一種である「寒號蟲」にまつわるもので、元・陶宗儀『南村輟耕錄』卷一五「寒號蟲」の條に「盛暑の時に當りては、文采絢爛にして乃ち自ら鳴きて、『鳳凰も我に如かず』と曰う。深冬嚴寒の際に比至(および)、毛羽脫落し索然として穀雛の如し。遂に自ら鳴きて、『過ぎるを得れば且く過ぎん』と曰う」とある。○做甚―「爲甚麼」の意。「做」は「則」とも書く。「做」は「則」の一聲の轉。　○以下人家―小者・つまらぬ者、の意。

譯

淨が登場してセリフを言う　一年の計劃は春にたてる。一日の計劃は寅の刻にたてる。一刻の計劃は勤勉さにある。わたくし、李員外の長男でございます。我が家では、赤いものは金、白いものは銀、まだらのものは鼈甲で、犀の頭上の角や、象の口中の牙があり、零陵香の草で作った布團を使い、沈香ではしごを作り、瑪瑙を地に敷きつめ、足を洗う大きなタライで飯を食い、おまるでスープを汲んでおります。うちの親父は格好をつけるのつけないのって、ちょっと宮參りに出かけて、劉知遠というある男を入り婿に連れ歸ってまいりました。こいつが根っからの屈强なやくざ者。農作業をやらせても何もできず、毎日小作人を引き連れ、田んぼで大聲を出し拳の稽古に精を出す始末。そのうち、拳や蹴りで人を殺し逃げ出そう

もんなら、われらが身代わりに捉えられます。ここは一つ、村のその邊を捜し、奴を見つけ出してボコボコにしてやりましょう。たとえ、うちの親父とおふくろが止めに入っても、もろともにぶんなぐってやるだけ。みなの衆、親父おふくろを毆り罵って、彼等に教えてやりましょう。公明正大な天は欺くべからず。永遠に盡きない長江の流れと違って人の心は變わりやすいもの。覇王項羽は渡し船がなかったから烏江を渡らなかったのではない。一夜の夫婦にも百夜の恩愛はある。生が軒をかくしぐさ ゴーゴー。淨のセリフ 粗忽な王兒や、どこで雷が鳴っているんだ。井戸を擔ぎ瓦をしまえ。雨がひどくなって濡れてしまうぞ。ドーン どこでこんなに雷が鳴っているんだ。きっと天雷だ。きっと地雷だ。いやちがう。ああ、雷に打たれるぞ。さっきおふくろと親父を罵ったから、きっと雷が俺を打つんだ。雷が落ちたかな。ドーン 落ちたぞ。俺はまだ生きている。ちょっとまてよ。坂の上にあがってみよう。どこだどこだ。火が出たぞ。消しにいこう。ちっちっ、火じゃないぞ。なんと、まさしくこのやくざ者だったか。ぶん毆ってやる。毆るしぐさ 外が登場してセリフを言う 自分の身だしなみを整えることすらしないで、夜な夜な大騒ぎする必要がどうしてあろうか。お前はここで何を大騒ぎしているのだ。どうして彼を毆るのだ。淨のセリフ こいつを追い出すのさ。我等田舎の百姓は田を耕し畝を作り、秋に收穫して冬に貯えるんだ。こいつがいて何になる。日がな一日拳法ばかりやってやがる。外のセリフ このばか者めが。さがっておれ。わしの申すことを聞け。彼はつまらぬ小者ではない。彼の父親はわしと多少の付き合いがあったのだ。

外唱

5【駐馬折櫻桃】本是豪家、前住沙陀小里村。他暫時落薄暫時貧。我領歸來他自依本分。你(元)〔緣〕何怒生嗔。交他進也無門。退也無門。全不由大人。苦樂不均。淨唱

6〔【前腔】〕上告年尊。他又不是我相識又不是我親。況(閑)〔兼〕官司文榜、不許停留面生喬人。他當初來(例)〔歴〕不分明。兩隣脚色難藏隱。他出入又無憑。胡做胡爲、一箇眞歹人。累及我莊門。生唱

7〔【前腔】〕一(旦)〔擔〕英雄、命蹇時乖不(知)〔値〕半分。只得忍耐、進也無門退也無門。(和)公婆(受)〔收〕(祿)〔錄〕難藏隱。一朝枯木再逢春。只得睎睎溫和、結草啣環、須當來報恩。萬載不生塵。淨下

韻 眞文、庚亭韻。「和」は失韻。

校記 5—汲本、始譜、成譜、欽譜、增譜、新譜、京譜。○【駐

馬折櫻桃】汲本・始譜・成譜・欽譜・増譜・新譜【駐馬摘金桃】、京譜【摘金桃】　○「本是豪家」汲本・始譜・成譜・欽譜・増譜・新譜「他本是豪門」、京譜「他本豪門」　○「前住沙陀小里村」汲本・成譜「住在沙陀小李村。我與他公公來往、與我家中有些薄親」、欽譜「就住在沙陀小李村。他公婆來往、與我家中有些薄親」、欽譜「住在沙陀小李邨。我與他公公來往、與我家中、元有薄親」、増譜・新譜「住在沙陀小李村。我與他公公來往、與我家中、元有薄親」、京譜「住在沙陀小李村。與他公公來往、與我家中、原有薄親」　○「他」京譜、無　○「落薄」始譜・欽譜・増譜・新譜・京譜「落泊」、成譜「落魄」　○「我領歸來他自依本分」汲本・成譜「領歸來自然依本分」、始譜「你們休得閒爭論」、欽譜・増譜・新譜「領歸來必定能安分」、京譜「領歸必定能安分」

○「你元何」汲本・始譜・成譜「何故」、欽譜・増譜・新譜・京譜「何必」　○「交他」始譜・成譜・欽譜・増譜・新譜「教他」、京譜、無　○「由」汲本「有」

6―汲本。　○〔前腔〕汲本【前腔】　○「年尊」汲本「嚴尊」

○「我相識又不是我親」汲本「我家相識我家親」　○「況閑」汲本「況兼」　○「停留」汲本「窩藏」　○「他當初來例」汲本「當初來歷」　○「兩隣脚色難藏隱」汲本「被兩隣覺察難藏隱。打教他須防人不仁」　○「他出入又無憑」汲本「出入無憑」

註　○【駐馬折櫻桃】―諸本は【駐馬摘金桃】或いは【摘金桃】とし、曲譜類には【駐馬折櫻桃】の曲牌名は見えない。ただし、本テキストの二曲目・三曲目は格律をほぼ同じくし、しかも諸本のそれと異なるように思われるので、曲牌名は敢えて原文に従った。一曲目は、二曲目・三曲目と格律を異にする。校記參照。　○本是豪家―諸本は【駐馬摘金桃】の格律に従い、「家」を「門」に作って押韻する。本テキストの三曲目第一句も押韻していないため、「家」のままとした。　○前住沙陀小里村―「前住」を、兪本は「前往」に作る。また、諸本は【駐馬摘金桃】の格律に従い、この句の後に二句ないし三句が補われている。校記參照。

○進也無門退也無門―常語。進退窮まった狀態をいう。　○不由大人―ここでは「大」を衍字とし、「不由人(思い通りにはならない)」として譯出した。ただし「不由大人」で、父親の意に反して、と解釋することも可能かもしれない。　○苦樂不均―常語。不公平だ、の意。『魏書』卷一八「元孝友傳」に「百家の內、帥二十五有り、徵發 皆な免ぜられ、苦樂 均しからず」とある。　○〔前腔〕―汲本に從って補った。三曲目は校訂しうるテキストがないが、格律から【前腔】を補った。　○文榜―掲示・告示・布告、の意。(漢)參照。　○面生喬人―「喬人」は「喬才」と同じく、「壞蛋」「無賴」の意。(漢)參照。全體で、何處の馬の骨ともわからぬやくざ者、の意。　○脚色―汲本は「覺察」に作るが、「脚色」は元來吏牘語で、出身・履歷・身分、といった意。「兩隣脚色」で、近所の方々、の意に解

した。『曲江池』第四折に「這也有甚麼難見處。張千、取他遞的脚色來我看」とある。　○胡做胡爲―「胡做非爲」に同じ。でたらめや非道な行爲をすること。なお、【駐馬摘金桃】の句格からいうとここで押韻すべきであるが、三曲目の同じ箇所でも韻を踏んでいないため、敢えて失韻とはしなかった。　○不(知)(値)半分―林昭德「廣陵刻印校補本《成化新編白兎記》再補正」(『西南師範大學學報(哲學社會科學版)』一九八八年第四期)は、成化本『白兎記』の後文、第三三葉aに「作賤身軀、不値半分」という曲辭があり、また汲本第三二出に「爹娘養我如金寶、如今不値半文錢」というセリフが見えることを指摘し、この「知」を「値」に校訂する。これに從う。「不値半分」は、何の値打ちも無いことをいう常語。宋・普濟『五燈會元』卷一六「天衣義懷禪師」に「之を用いれば則ち敢えて八大龍王と富を鬬わん。用いざれば都來(すべて)半分錢にも直(あたい)せず」、『水滸傳』第二回に「我枉自經了許多師家、原來不値半分」とある。　○(和)公婆―「和」は衍字であろう。　○一朝枯木再逢春―「枯木再逢春」で成語。「枯木逢春」「枯木花開」ともいう。　○睟睟溫和―江本・兪本は「悄悄」に作るが、「悄悄溫和」では意味をなさないように思われる。あるいは「恰恰」の誤りか。なお、「和」は失韻。　○萬載不生塵―成語。元本『琵琶記』第一六出、汲本第六出等に「惟有感恩並積恨、萬年千載不生塵」とある。恩や恨みを永遠に忘れないことをいう。

譯

外のうた

5【駐馬折櫻桃】元々は豪族の出、以前は沙陀小里村に住んでおったのじゃ。彼は落ちぶれたかと思えばまた貧乏。わしが連れ歸ったからには彼はおとなしくしておるじゃろう。お前は何を怒っているのだ。彼は進むに進めず。退くにも退けず。全く思うままにならない狀態におる。不公平にも彼は苦勞ばかりしておるのじゃ。淨のうた

6【前腔】父上に申し上げる。彼は私の知り合いではないし親族でもありません。それに加えて御上の掲示に、「見知らぬやくざ者を、逗留させてはならない」とあります。彼は當初の來歷が不確かです。近所の人々に隱しておくのは難しいでしょう。村を出入りする時に身分を證するものもありません。でたらめで非道な行爲をはたらく、本當の惡人です。我が村にも累が及ぶでしょう。生のうた

7【前腔】英雄でありながら、時の運つたなく半文の値打ちさえないこの身。ただ堪え忍び、進むに進めず退くに退けぬというありさま。旦那さまと奧さまに拾っていただいたことは隱れないこと。枯木も再び春になれば花を咲かせるというもの。ただおとなしくしているしかありません、草を結び環を含み、きっと御恩に報いましょう。永久に忘れることはいたしません。淨退場する

生白 (太)〔大〕公、我劉知遠依舊還去馬鳴王廟中去宿歇去也。 外白 後生、你休胡說。我家中(以)〔已〕無別人、止有女孩兒、小字三娘、招你爲婿。我一了說的、李弘一這斯有些酒(哇)〔性〕(噪)〔躁〕惡、不要和他一般見識。 外唱

8【(□□□)〔憶多嬌〕】你休嘆息。休(顧)〔怨〕疑。你將他小孩兒一般見識。浪語花言都勾息。凜凜雄威、(凜凜雄威、)管交你前程顯(藉)〔跡〕。 生唱

9〔【前腔】〕蒙感(急)〔激〕。(成)〔承〕愛惜。你是我重生父母將何報(得)〔德〕。自恨我時乖相輕(侍)〔視〕。暮打朝嗔、(暮)打朝嗔、交我如何過的。 下

韻 質直(疑・視)、拍陌韻。

校記 汲本。 ○【□□□】汲本【憶多嬌】 ○「嘆息」汲本「怨憶」 ○「休顧疑」汲本「莫嘆息」 ○「你將他小孩兒」汲本「將他做小兒」 ○「浪語」汲本「巧語」 ○「勾息」汲本「勾訖」 ○「凜凜雄威」汲本「凜凜雄威、凜凜雄威」 ○「管交你前程顯藉」汲本「管取前程顯赫」 ○【【前腔】】汲本【前腔】 ○「蒙感急」汲本「蒙感激」 ○「成」汲本「承」 ○「你是我重生父母將何報得」汲本「你便是親生父母將何報德」 ○「自恨我時乖相輕侍」汲本「自恨時乖遭困厄」 ○「暮打朝嗔、打朝嗔」汲本「暮打朝嗔、暮打朝嗔」 ○「交我如何過的」汲本「如何過得」

註 ○宿歇―「宿休」ともいう。「歇」は「休」の一聲の轉。 ○一了―「向來」の意。(宋元)參照。 ○不要和他一般見識―喧嘩をするな、という意の常語。 ○【(□□□)〔憶多嬌〕】―原文は行頭に曲牌名が入ると思われる空格がある。汲本に從って曲牌名を補った。汲本においては入聲質直韻で到底するが、成化本では一曲目第二句「疑」で機微韻、二曲目第四句「(侍)〔視〕」で支時韻を混用していると思われる。後註參照。 ○疑―『洪武正韻』では陌韻にも「疑」字があがっているが、常識的には機微韻と考えるべきであろう。 ○浪語―「浪言」「浪舌」に同じ。でたらめをいう、の意。(宋元)參照。 ○勾息―「勾」は、「一筆勾」の「勾」で、吏牘語。カギ印をつけて文字を消すこと。汲本は「勾息」を「勾訖」に作る。 ○凜凜雄威(凜凜雄威)―次曲の句格に從って、一句を疊して補った。 ○管―きっと、の意。 ○【【前腔】】―汲本に從って補った。 ○蒙感(急)〔激〕―「蒙恩感激」の意として解した。 ○輕(侍)〔視〕―江本・兪本は、ともに「侍」を「待」に作る。ここでは、「侍」を「視」の同音からくる誤りと考えて校訂したが、この曲が質直韻で押韻するとすれば失韻である。韻脚からすれば「侍」を「易」(質直韻)に校訂する方法もあるが、「易」と「侍」の字形は必ずしも近くはないだろう。「輕視」「輕易」ともに、あなどる、の意。

○暮打朝嗔〔暮〕打朝嗔―二度目の「〔暮〕打朝嗔」は、原文ではおどり字が三字分しかないが、汲本に従って一字を補った。

譯

生のセリフ 旦那さま、わたくし劉知遠は昔のように馬明王廟に歸って泊まることといたしましょう。外のセリフ 若者よ、馬鹿なことをいうでない。わが家には他でもない、ただ娘が一人いるだけで、幼名を三娘という。おまえを入り婿としたい。わたしがこれまでずっといってきたように、李弘一というやつは酒癖が惡いから、やつとは喧嘩をするでない。外のうた

8【憶多嬌】嘆くでない。憂いを抱くでない。彼を子どもと同じ程度の知惠しかないと思え。つまらない無駄話はやめるとしよう。りりしく堂々としたおまえ、りりしく堂々としたおまえ、きっと前途が開けるだろう。生のうた

9【前腔】ご恩を受けて感激いたしました。親切に目をかけていただくとは。あなたは父母同然の大恩人、どのように報いたらよいものか。運つたなく人に馬鹿にされているのが恨めしい。暮にはぶたれ朝には叱られ、暮にはぶたれ朝には叱られ、わたしにどう暮らしていけというのでしょう。退場

第六出 〔末(院子)、外(同前)、貼(同前)、淨(山人先生)、生、旦〕

末上白 詩曰 列綺堆羅開大筵。滿堂都是地(神)〔行〕仙。
畫堂深處風光好、別是人間一洞天。

小人不是別人、是李大公家使喚的院子李成的便是。大公今日納劉知遠爲婿、不免打掃庭堂乾淨。安排酒禮盃盤、香〔花〕紙燭、寶瓶鞍子、俱(以)〔已〕停當。請出大公大婆早來。外·貼上 〔外〕久旱逢甘雨、他鄉遇故知。貼 洞房花燭夜、一對好夫妻。外白 婆婆、男子生(兒)〔而〕願爲之有室、女子生(兒)〔而〕願爲之有(嫁)〔家〕。婆婆、我見劉知遠、久後必有榮顯。今日將三姐女孩兒招他爲婿、婆婆意下如何。貼白 (計)〔既〕然公公如此、老身(言)〔焉〕敢阻當。外白 (計)〔既〕然這等、婆婆、好好好。不免叫過李成來。李成。末白 有祿之人人伏侍、沒福之人伏侍人。員外呼喚、不免上前拜揖。外白 李成、你來了。末云 小人在此。〔外白〕你替我請一箇山人先生來。今日招納劉知遠爲婿、請他與我進親。〔來〕〔末〕白 小人理會得。拜辭恩相去、專聽好音來。轉灣抹(脚)〔角〕、這里便是。叫科 張先生在家麼。淨嘿 那箇叫。末云 小人在此。小人是李大公家相。請。淨云 有甚事。末云 今日招劉知遠爲〔婿〕、請你之親。請行。大公、

報。先生在此來也。外白 請進來。淨云 大公拜揖。〔外白〕先生拜揖。起動先生、選箇良時吉日。淨白 今日天黃道、地黃道、日月雙黃道。就好。請新人出來。

註 ○末上白―汲本第七出においては、末が李三公、外が李大公に扮して登場しているが、成化本にあっては李大公・李三公ともに外が扮し、二人は同時には登場しない(成化本第七出で李三公が登場する際には、李大公は既に死去している)。成化本の脚色・配役は當時の劇團組織をある程度忠實に反映していると思われる。　○列綺堆羅開大筵……別是人間一洞天―末の登場詩。「地(神)〔行〕仙」については、前掲の林昭德論文の校訂に從った。また後半二句は常語。元本『琵琶記』第九出に「瓊林深處風光好、別是人間一洞天」、同第一八出に「畫堂深處風光好、別是人間一洞天」とある。「洞天」は仙界をいう。なお、「十大洞天」「三十六洞天」「七十二福地」という語が古くからあり、その具體的な場所は『雲笈七籤』卷二七、元刊本『事林廣記』癸集卷下「仙境類」等に列擧されている。　○院子―「院公」と同じ。年寄りの下男。通俗文學においてはしばしば「李成」の名で登場する。(宋元)參照。　○酒禮盃盤香(花)紙燭寶瓶鞍子―婚禮の儀式に用いる品々。「香(花)紙燭」は、江本・兪本がすでに同樣に校訂する。「寶瓶」は、花嫁が輿入れの際に持つ瓶。Mechthild Leutnerは「老北京」の婚禮の習俗として「有人遞給她(新娘)一箇"寶瓶"。瓶中裝著小米・小麥・高粱和兩種豆類等五穀、有錢人家還有裝金銀如意和金錠・銀錠的。瓶口蒙著紅綢子、繫著五彩絲線。此瓶中裝的東西是財富和兒女興旺的象徵」と記述する(王燕生等譯『北京的生育・婚姻和喪葬―一九世紀至當代的民間文化和上層文化』第二章。北京中華書局、二〇〇一)。『金瓶梅詞話』第一九回に「婦人抱着寶瓶、逕往他那邊新房裏去了」、同第九一回には「然後家中大小都送出大門、媒人替他帶上紅羅銷金蓋袱、抱着金寶瓶」とある。また「鞍子」については、入矢義高・梅原郁譯註『東京夢華錄』(平凡社東洋文庫、一九九六)卷五「嫁むかえ」の條に、「一人が鏡を捧げて、うしろ向きに歩きながら花嫁を導いて、鞍をまたぎ草と秤の上を驅けすぎて、門にはいる」といい、同書同條註(一四)に詳しい考證がある。「鞍子」は「鞍馬」ともいい、神前のお供えとしても用いる。婚禮に「瓶」と「鞍」が用いられるのは「平安(「瓶鞍」と同音)」を願うため。　○停當―「妥當」の意。「停」に語助の「當」がついて二音節化したもの。語助「當」については、(匯)參照。　○久旱逢甘雨……一對好夫妻―この登場詩は、「得意詩」として有名な成句を第三句まで用いたもの。たとえば宋・洪邁『容齋四筆』卷八「得意失意詩」の條は、「得意詩」をあげて「久旱に甘雨に逢い、他鄕に故知を見る。洞房花燭の夜、金榜 名掛かるの時」という。　○男子生(兒)〔而〕願爲之有室女子生(兒)〔而〕願爲之有(嫁)〔家〕―成語。『孟子』「滕文公」(下)

に「丈夫生而願爲之有室、女子生而願爲之有家、父母之心、人皆有之」とあり、『蕭淑蘭』第四折、『琵琶記』第一二出等に「男子生而願爲之有室、女子生而願爲之有家」とある。それらによって「兒」を「而」に、「嫁」を「家」に校訂した。　○有祿之人人伏侍沒福之人伏侍人―成語。「院子」の登場詩。『黑旋風』第三折等に「有福之人人服侍、無福之人服侍人」とある。「有祿」は普通「有福」という。　○（外白）―文脈により補った。後文も同様に補う。　○山人先生―「山人」は占い師・藥屋の屋號。唐・賈島『賈浪仙長江集』卷九「贈牛山人」詩に「石を鑿ち蜂を養い蜜を買うを休め、山に坐り藥を秤るに星を爭わず。古來隱者多くトを能くす、先生に就きて丙丁を問わんと欲す」とある。（漢）參照。「先生」は、道士、の意。（宋元）參照。　○進親―『西遊記』第五四回に「喫了喜酒進親才是」とある。あまり用例を見ないことばであるが、結婚する、といったほどの意であろう。　○恩相―もともとは長官に對する敬稱だが、ここでは外への敬稱として用いられている。　○小人是李大公家相請―この一段を、江本・兪本は斷句せず一句に作る。ここでは「家相」が一語であり、家僕の長をいう「堂後官」等と同意であると考えた。「家相」は『禮記』などでは、卿大夫の家の執事、の意をもつ。（漢）參照。　○之親―緣組の謂。『裴度還帶』楔子に、娘と裴度との緣組を希望する韓瓊英夫人の申し出を承けての白馬寺住職のセリフに「夫人、俺先與中立謝允肯之親者（わたくしがまず中立に代わって、緣組をお許しくださったことにお禮申し上げます）」とある。　○天黃道地黃道日月雙黃道―吉日をいう常語。黃道を十二宮に等分し、そのうち青龍・明堂・金匱・天德・玉堂・司命の六辰を太陽が通過する日を吉日（「黃道（吉日）」）としたことによるというが、「地」や「月」の「黃道」がいかなることをいうのかを含め、具體的には不明。『劉弘嫁婢』第二折、王秀才が裴蘭孫と李春郎の婚姻を占うことばにも「天黃道、地黃道、日月雙黃道、子丑寅卯、今日正好」とある。

譯

末が登場してセリフを言う　詩に曰く　きらびやかな人たちが居並ぶなか宴會が開かれる。堂を滿たすは地上の神仙たち。華麗な堂舍の奧深くは見事な眺め、あたかも別世界にいるかのよう。

わたくしは他でもありません、李の旦那さまの家で使われております爺やの李成です。旦那さまが今日、劉知遠を入り婿にするとのこと、庭と堂をきれいに掃除いたしましょう。酒と禮物と杯や皿、香と花と紙錢や蠟燭、寶瓶に鞍、これら全て用意できました。旦那さまと奧さまに早くお出でいただきましょう。外と貼旦が登場　外のセリフ（人生で嬉しいのは長い日照りのあとで惠みの雨にあった時、他鄉で舊友と出會う時。）　貼旦のセリフ　洞房にて花燭をともす夜、一組の良き夫婦。　外のセリフ　婆さんや、男子が生ま

れれば妻を娶ることを望み、むすめが生まれれば夫に嫁ぐことを望むものだ。婆さん、わしが劉知遠を見るに、あいつは暫くすれば立身出世する男に違いない。今日、三女を嫁がせて彼を入り婿にしてしまおうと思うが、婆さんの考えはどうだ。貼旦のセリフ あなたがそう仰るのなら、どうしてわたしが止めましょうか。外のセリフ それならば婆さん、問題は無い。李成を呼ぶとしよう。李成よ。末のセリフ 金持ちには人が仕え、福が無い者は人に仕える。旦那さまがお呼びだ、進み出てちゃんと挨拶をいたしましょう。外のセリフ 李成よ、來たか。末のセリフ やって參りました。外のセリフ おまえ、わしに代わって山人道士どのにお出でいただくようお願いして參れ。今日、劉知遠を入り婿とするが、彼とわしの縁組みをすすめてもらわねばならん。末のセリフ 心得ました。それでは旦那さま、おいとまいたします。ただ吉報をお待ち下さい。角を曲がれば、おっと、ここだ。呼ぶしぐさ 張どのはご在宅ですか。淨が應じる 誰が呼んだんだ。末のセリフ わたくしめがここに參りました。わたくしは李大公の家のじいでございます。どうぞお願いいたします。淨のセリフ 何事でしょう。末のセリフ 本日、劉知遠を入り婿といたしますので、媒酌をお願いいたしたく。さあお出で願います。旦那さま、お知らせいたします。山人どのがいらっしゃいました。外のセリフ どうぞお入りください。淨のセリフ 旦那さま、ご機嫌よろしゅう。外のセリフ 山人どのもご機嫌よろしゅう。お手數ですが山人どの、ひとつ縁組みの吉日を占ってはいただけないでしょうか。淨のセリフ 今日は天も黃道、地も黃道、日月も兩方黃道。吉日です。新郎新婦を連れてきてください。

生·旦上 〔旦〕唱

1【臨江仙】一朶花枝今有主、姻緣感謝蒼天。生唱 蒙君不棄我貧寒。洞房花燭夜、百歲永團圓。

淨云 一步一花開。二步二花開。三步花心落、奉請新人下轎來。金斗金樑柱、金毛獅子兩邊排。新人入得李家宅。懷里抱着銀寶瓶。一上香、二上香、三上香。上香(以)〔已〕(卑)〔畢〕、望神天設拜。拜、(行)〔興〕、拜、(行)〔興〕、拜、(行)〔興〕、拜、(行)〔興〕、四拜。平身、回身。參拜堂上雙親。拜、(行)〔興〕。外·貼做倒科 外白 先生、劉知遠前程有分、不要交他拜我。哎、我頭疼也。淨云 大公、請二位新人喫交盃酒。外白 請先生撒撒帳。淨念云 一撒東。三姐招箇窮老公。堂前行禮數、拜狗(散)〔作〕烏龍。撒帳南。兩口兒做事莫喃喃。白日莫要鬬閑口、到晚(坑)〔炕〕上不要頑。撒帳西。雙雙一對好夫妻。三姐績(二)〔麻〕線、女婿(吊)

〔釣〕〔甜〕〔田〕鷄。撒帳北。夫妻永和睦。夜晚做的事、早晨起來不要說。撒帳前。雙雙一對並頭蓮。生下五男幷二女、七子保團圓。三箇會喫酒、四箇會博錢。兩箇脚頭睡、五箇那頭眠。九箇齊撒尿、(坑)〔炕〕上好撑〔舡〕〔船〕。撒帳〔以〕〔已〕〔卑〕〔畢〕。閑人請出。冈唱

2【(□□□)〔天下樂〕】我女孩兒。招他爲婿。看雙雙效〔魚〕〔于〕比翼。五百年前結會。相看〔比〕〔彼〕此不暫離。一步不厮離。圖伊(□□□)〔改門閭〕、滿家都榮貴。㕣 豈容易。雙雙(進)〔盡〕老、百年和(□□)〔你效〕〔魚〕〔于〕飛。生唱

3〔【前腔】〕知遠咨啓。荷公婆(受)〔收〕〔祿〕〔錄〕。幸一身免沈汚泥。五百年前結會。山鷄怎伴鸞鳳飛。深謝不嫌棄。㕣 豈容易。雙雙(進)〔盡〕老、百年和你(効)〔效〕〔魚〕〔于〕飛。

(外云)詩曰 冈 一對夫妻正及時。(賤)〔貼〕郎才女貌兩相宜。生 在(添)〔天〕願爲比翼鳥、旦 入地同共連理枝。並下

韻 1—天田、干寒韻。2・3—支時、機微(翼)、灰回、姑模(錄)韻。

校記 1—汲本。 汲本は全曲を以下のように作る。【七娘子引】生上 蒙君不棄我身寒。今日裏喜結良緣。旦上 一朵奇花今有主、姻緣感謝蒼天。

2—汲本、始譜、欽譜、增譜、新譜、京譜。 ○【□□□】諸本【天下樂】 ○「招他爲婿」諸本「喜室家男女及時」 ○「看雙雙」始譜「有雙雙」 ○「效魚」汲本「俏如」、始譜・欽譜・增譜・新譜・京譜「宛如」 ○「相看比此不暫離。一步不厮離」汲本「相看到此不暫離。行坐如魚水」、始譜・欽譜・增譜・新譜・京譜「今生共成連理枝。配合成一對」 ○「圖伊□□□」汲本「圖伊改門閭」、始譜・欽譜・增譜・新譜・京譜「從今改門閭」 ○「滿家都」始譜・欽譜・增譜・新譜・京譜「我也身」 ○「進老」諸本「盡老」 ○「百年和□□魚飛」汲本・始譜・欽譜・增譜・新譜「百歲效于飛」、京譜「百歲效于飛。百歲效于飛」

3—汲本、成譜。 ○【前腔】汲本【前腔】、成譜【天下樂】 ○「公婆受祿」諸本「公婆收錄提攜」 ○「免沈」諸本「免遭」 ○「怎伴鸞鳳」汲本「怎與鳳凰」、成譜「怎逐鸞鳳」 ○「深謝不嫌棄」諸本「深感不嫌棄。銘心在肺腑、難報恩和義」 ○「豈容易。雙雙進老、百年和你効魚飛」汲本「㕣 豈容易。雙雙盡老、百歲效于飛」

註 ○【臨江仙】—欽譜卷八「南呂宮引子」、及び『張協狀元』第九出に見える【臨江仙】の格律に合致する(但し、欽譜は第一句も押韻とする)ため、曲牌名を補った。汲本は曲牌を【七娘子引】とし、別の曲文を置くが、詞譜・曲譜類の格律に合致しない。校記參照。 ○一步一花開……懷里抱着銀寶瓶—「開」「來」「排」

「宅」(皆來韻。ここでの「宅」は非入聲音)で押韻する。「一歩一花開云々」は、『偸梅香』第四折に見える、丑扮する「山人」の詩に「錦城一歩一花開。專請新人下馬來。今日鸞凰成配偶、美滿夫妻百歳諧」とあることから、新婦の輿入れを描寫する一種の常套表現か。第三句目「三歩花心落」は「打諢」であろうか。　○金斗金樑柱金毛獅子―輿入れの儀式に用いられる、家や獅子をかたどった細工の類を指すのであろうが、具體的なことは不明。「斗」は、ますがた。　○望神天設拜―「望」は、「向」「往」の意で、介詞。　○拜(行)(興)―「拜」は跪拜、「興」は身を起こすこと。　○平身―「拜」「興」の後、直立の姿勢をとること。『元史』巻六七「禮樂志」(一)「元正受朝儀」の條に「通贊 贊して曰く『復位』、曰く『拜』、曰く『興』、曰く『拜』、曰く『興』、曰く『平身』」とあり、『前漢書平話』巻中に「引(蒯)通見漢王。拜舞畢、高皇賜通平身」とある。(宋元)(漢)参照。　○外·貼做倒科―成化本『白兎記』第四二葉bには、李三娘が息子の咬臍兒を拜禮すると、咬臍兒が倒れるシーンがあり、また『五侯宴』第三折には、李從珂が實母に拜禮された際、坐っていた李從珂が突然不隨意に立ち上がるというシーンがある。これらは、母の跪拜を受けるのは不孝の極みと天が咎めたものと思われる。ここも同様に、後の天子の跪拜を受けるのは不敬の極みと天が倒したものであろう。　○交盃酒―婚禮儀式のひとつ。宋·孟元老『東京夢華錄』巻五「娶嫁」の條に「兩盞の綵を以て之れを結連するを用て、互いに一盞を飲ましむ、之れを交盃酒と謂う」とあり、前掲の入矢義高·梅原郁譯註『東京夢華錄』巻五「嫁むかえ」の條、註(一八)に詳しい考證がある。　○撒撒帳―「撒帳」については、入矢·梅原譯註『東京夢華錄』巻五「嫁むかえ」の條に、「花嫁は左向きに、花婿は右向きに坐る。このとき、婦人たちは金貨·色絹·果物などを撒き散らす。これを『撒帳』という」といい、その註(一六)に詳しい考證がある。ただ、本テキストの展開では「撒帳」は道士によって主宰されており、その點では、同書同條の前文に「花嫁が乘物をおりると、陰陽師が枡のなかに穀物·豆·錢·果物·菓たばなどを入れたのを持って、呪文をとなえながら門に向って撒く。子供たちは我れ勝ちにそれを拾う。これを『撒穀豆』といい、俗説では、青羊神などの凶神を攘うのだという」と述べる「撒穀豆」に、「撒帳」を讀み替えるべきかもしれない。なお、本テキストで以下に續く淨のセリフは、『東京夢華錄』が「呪祝(呪文)」と述べるものに相當し、韻文になっているが、入矢·梅原の考證が言及する『事林廣記』や『清平山堂話本』所收「快嘴李翠蓮記」等の呪文が花嫁花婿を壽ぐ內容になっているのに對し、本テキストでは道士(すなわち淨)の「打諢」になっている。　○拜狗(散)(作)烏龍―宛委山堂本『說郛』弓二四所收、宋·韋淵『槁簡贅筆』「烏龍」の條は、當時「拜狗作烏龍」という「俚語」があったことに言及する。このことばの意味につい

ては、宋・龔明之『中吳紀聞』巻五「范無外」の條に「范周、字無外。……少くして不羈の才を負い、……未だ嘗て人に屈折せず。石監簿存中に園亭の盤門の内に在る有り。嘗て往きて之れに謁するも、遇わざれば壁間に題して云わく『范周 石存中に來謁するも、未だ必ずしも存中は石崇に似ず。借しむべし南山焦尾の虎の、頭を低れ狗を拜して烏龍と作すを』と」とあることからすると、つまらぬものを立派なものとして敬うことをいうのであろう。本劇のこの場面では、未だうだつのあがらない劉知遠を入り婿に迎えたことをこのようにいうのではあるまいか。

○三姐績(二)〔麻〕線女婿〔吊〕〔釣〕〔甜〕〔田〕鷄―『張協狀元』第三九出、淨の「打諢」に「日裏織些布、夜裏緝些麻。秋間收些炭、春到採些茶。冬天依舊忍凍、夏月去釣黑麻」という。ここにいう「黑麻」は、蝦蟇、の意。「績麻線」「釣田鷄」は貧乏な農家の暮らしを嗤うものであろう。なお「吊甜鷄」は、すでに江本・兪本が「釣田鷄」に校訂する。　○撒帳北―以下の一段は「北」にあわせて「睦」「說」と入聲韻で押韻する。成化本『白兎記』全體では入聲が消失する方向にあり、それからすれば、「撒帳」の呪文全體が他書からの借用であることを思わせる。

○並頭蓮―『古詩紀』巻五二「晉」(二二)「清商曲辭・古辭」「西曲歌」に見える「青陽度」第三曲に「下に並根の藕有り、上に並頭の蓮有り」(『玉臺新詠』巻一〇は「同心蓮」、『樂府詩集』巻四九は「並目蓮」に作る)とある。この語は『雍熙樂府』巻一一【新水令】「駙馬」第一〇曲【胡十八】に「天配合一對兒俏姻眷、生拆散並頭蓮」とあるように、むつまじい夫婦をたとえる常語。

○生下五男幷二女七子保團圓―「五男二女」「七子團圓」はともに常語。『清平山堂話本』「快嘴李翠蓮記」、李翠蓮婚禮のシーンに「五男二女、七子團圓」とあり、前掲の入矢・梅原譯註『東京夢華錄』巻五「出產と育兒」の條には「妊婦が產み月にはいると、その月のついたちに、父母の家では、銀盆かそれとも綾か色繪の盆に、粟がら一束を盛り、上に錦繡もしくは生色の袱紗をかぶせ、その上に造花や燈心草をべたべたと插し立て、五男二女の模樣を貼り並べ、蓋ものに饅頭をつめて贈りものにする」とある。「五男二女」は吉祥とされ、その考證については、梅原郁譯註『夢粱錄』三(平凡社東洋文庫、二〇〇〇)巻二〇「嫁むかえ」の條、註(一六)を參照。　○【(□□□)〔天下樂〕】―原文では墨釘になっている。諸本が【天下樂】として本曲を引くため、これに從った。しかし格律からいえば、一・二曲目とも二句目の字數が足りず、さらに二曲目は合唱の前に五字句二句が脫落している。【天下樂】としては例外的であり、疑問が殘る。

○雙雙效(魚)〔于〕比翼―文意により、「魚」を「于」に改めた。

○五百年前結會―「五百年前」は男女のえにしをいう常語。『劉知遠諸宮調』第三【仙呂調】【六麼令】に「五百年前姻眷」とある。また「結會」は、めぐり會う、の意。『張協狀元』第一二出【獅子序換頭】第三曲に「前世料得、曾共結會」、『雍熙樂府』巻一六

【三十腔】「慶壽」に「五百年前分定了。結會在今宵」とある。○(比)(彼)此―文意により改めた。すでに江本・兪本が同様に校訂する。　○圖伊(□□□)(改門閭)―原文は磨滅による缺字。諸本により補った。　○雙雙(進)(盡)老―「盡老」は「終老」。『小孫屠』第八出【繡帶兒】第三曲にも「不棄取甘爲箕箒、只願盡老連理」とある。　○百歲和(□□)(你效)(魚)(于)飛―磨滅による缺字は次曲を參照して補った。「于飛」は『詩經』「周南・葛覃」に典據を持つ語で、「比翼」と同意。　○【前腔】―汲本により補った。　○山鷄怎伴鸞鳳飛―『范張鷄黍』第四折【鮑老兒】に「怎把山鷄比鳳凰」、『幽閨記』第二二出【撲燈蛾】第二曲に「我是山鷄野鳥、配青鸞無福難消」とある。山鷄と、鳳凰・鸞鳳を比較するのは常套表現。　○(否)―一曲目より、これ以下は合唱と思われるので、補った。　○一對夫妻正及時……入地同共連理枝―汲本第二一出、『殺狗記』第九出それぞれの退場詩にも同様の表現がある。後二句は唐・白居易「長恨歌」にある表現をふまえる。

譯

正と旦が登場　旦のうた

1【臨江仙】枝に咲く一輪の花は今あるじを得ました、天公にこのご縁を感謝いたします。　生のうた　あなたは素寒貧のわたしを捨ておかれず。洞房花燭のこの新婚の夜、百年のとわまで圓滿たるよう。

淨のセリフ　一歩あるけば一輪咲いて。二歩あゆめばふた房開く。三歩すすめば花心が落ちて。花嫁さんどうぞお輿からお降りを。黄金に輝くますがたに梁・柱、金毛の獅子が左右に居並ぶ。新婦は李家の邸宅に入ります。胸に銀の寶瓶を抱いて。最初のお香をお供えして、二回目のお香をお供えして、三回目のお香をお供えし。さあ、お香はあげおわりました。天の神に拜禮しましょう。拜禮、もとい、拜禮、もとい、拜禮、もとい、拜禮、もとい。四拜致しました。起きあがって身を正し、振り返って、堂上の兩親に拜禮します。拜禮、もとい。　外と貼が倒れるしぐさ　外のセリフ　山人どの、劉知遠は前途有望の身、わたしに拜禮なぞさせないでください。ああ、頭が痛い。　淨のセリフ　旦那さま、新郎新婦に交盃酒を勸めてください。　外のセリフ　山人どの、どうぞ「撒帳」してください。　淨が呪文を念じていう　まず東に穀豆を撒きまする。三女はこのたび貧乏亭主を入り婿とせり。堂前で婚儀を執り行ない、狗を拜んで黑き龍といたします。南に穀豆を撒きまする。夫婦は諸事ぐずぐず文句をいうなかれ。晝には喧嘩することなく、夜にはオンドルの上にてふざけるでない。西に穀豆を撒きまする。二人は好一對の良きめおと。三女は麻絲をつむぎ、

入り婿はせっせとかえる釣り。北に穀豆を撒きまする。夫婦はとわに仲睦まじい。夜にやらかすことどもは、朝に起きればいってはならぬ。前に穀豆を撒きまする。こうべを並べて花を咲かせる好一對のはちす。五男二女をもうけて後は、七人の子供はとわに一緒。三人が酒をおぼえ、四人は博打三昧。二人が足元に眠れば五人はあっちに眠る。家族九人が一度に寝小便をたれれば、オンドルの上じゃあ舟をこぐ。さて、「撒帳」を終えたからには、用のないものは出て行きなされ。外のうた

2【天下樂】私のむすめは。彼を入り婿にします。二人はさながら比翼の鳥のよう。五百年前に結婚の約束をしめぐり逢いました。お互いに見つめ合えば視線はしばらくも離れず。一歩も離れません。彼が家門を改めて、一族富貴となることでしょう。合唱 難しかろう。二人揃って年老いて、一生仲良く暮らすのは。生のうた

3【前腔】わたくし劉知遠は申し上げます。旦那さまと奥さまに拾っていただき、幸いにも泥の中に沈まずにすみました。五百年前に結婚の約束をしめぐり逢いましたが。キジがどうして鸞鳳と並び飛ぶことができましょう。私をお見捨てにならなかったことに深く感謝します。合唱 難しかろう。二人揃って年老いて、一生仲良く暮らすのは。

詩に曰く 外のセリフ 好一對の夫婦はまさに今が最も良い時。貼旦のセリフ 才子に佳人でどちらもお似合い。生のセリフ 天に在りては比翼の鳥となり、旦のセリフ 地に入りては共に連理の枝となりましょう。一同退場

第七出 〔淨(李弘一)、丑(李弘一の妻)、生、旦、外(李三公)〕

淨上白 湛湛青天不可欺。八箇螃蟹貼天飛。只有一箇飛不起。那箇元來是尖臍。做笑科 好笑好笑。娘老子做事顛倒、把箇(奴)〔如〕花似玉的妹子招了箇劉光棍、叫他拜堂、一拜把我娘老子拜的(咧)〔憋〕孤了。我如今叫出我老婆來、和他商量。好歹問他要一張休書、把這光(租)〔棍〕趕將出去、我兩口子受用家財。把這丫頭尋一箇門厮當戸厮對、把他嫁了、卻不是好。做叫科 老婆、老婆。叫不出來。他是不出來、從小兒兒女夫妻、把來慣了他了。只叫他大東大西、他便嚏。叫他甚麽。叫他親親的老婆娘。不是我怕老婆、順父母言情、呼爲大孝。笑科 親親的老婆娘。淨〔丑〕云 那箇叫、〔那〕箇叫。淨白 我兒子叫老婆娘。〔淨〕〔丑〕云 天呀天呀。有事沒事、只在老娘耳根臺子上(括括)〔聒聒〕

噪噪。這爛刀剁的、在那裏。呸呸。淨云 好娘、你(噗)〔撰〕、(噗)〔撰〕的我兒子不長(捘)〔俊〕了。我兒子三日不見你了。你請坐。我兒子磕三箇頭、一、二、三。(淨)(丑)云 起來、是五城兵馬發放總甲也。(淨云)只們快了。(淨)(丑)云 叫老娘出來、有甚麼屁放。淨云 我叫你出來、那劉光棍把我娘老子拜死了。我如今和你商量、定箇計策、趕這光棍出去。(淨)(丑)云 你叫他出來、問他要箇休書纔是了當。你叫將出來。(淨)做叫科 劉老棍棒、(二)〔挺〕(番)〔幡〕竿、(趕)〔擀〕面杖、都是打眼的光棍。生上云 舅舅妗妗喚我。不知那裏使(冷)〔令〕。不免上前拜揖。舅舅、拜揖。(淨)(丑)云 呸呸。舅舅騎着你家老子放轡頭。那箇和你一箇棒槌裏我墳、我兒差認了。淨云 你如今官休私休。生云 舅舅、官休若何、私休若何。淨云 官休、告你一(扶)〔狀〕蠱毒(厭昧)〔魘魅〕。生云 舅舅、如何是蠱毒(厭昧)〔魘魅〕。淨云 你把我老子娘(演)〔魘〕殃死了。生云 舅舅、私休若何。淨云 私休寫一封休書、把我妹子休了、隨你那去。生云 (舊舊)〔舅舅〕、你那妹子又不曾偷嚵抹觜、你那做妹子的又不曾做賊說(慌)〔謊〕、如何交我下休書。淨云 你不曾做賊說謊。馬鳴王廟裏溜鷄兒是我兒來。生云 (舊舊)〔舅舅〕、不要揭短。淨云 你如今就寫、不寫、就踢就打。生云 (臼臼)〔舅舅〕、(計)〔既〕然交我寫休書、替我打箇(藁)〔稿〕兒。淨云 你精弄人。我那裏會打(藁)〔稿〕兒。也罷。我說你寫。(生)做寫科 淨云 立休書人劉知遠。生寫 立休書人劉知遠。淨 供養妻子不和。生 供養妻子不和。淨云 情願休離前走。生 情願休離前去。淨云 並無親人逼勒。生 並無親人逼勒。淨云 不要哭。生 不要哭。淨笑 他連不要哭都寫上了。這句不是、抹了。生 我又添箇抹了。淨 又多了一箇抹字了。淨打科 從新寫不好。一句句替我寫得明白。

註 ○湛湛青天不可欺……那箇元來是尖臍—淨の登場詩。『三戰呂布』第一折、淨(孫堅)の登場詩に「湛湛青天不可欺。八箇螃蟹往南飛。則有一箇飛不動、看了原來是尖臍」、『存孝打虎』第三折、二淨の登場詩に「湛湛青天不可欺。八箇螃蟹往南飛。只有一箇飛不動、原來是箇尖臍的」とあり、『黃粱夢』第二折、淨の登場詩には「湛湛青天不可欺、兩箇碓嘴撥天飛。則有一箇飛不動、爭奈身上沒穿的」とある。「尖臍」はオスの蟹。メスは子を抱いて腹が丸くなるので「圓臍」という。この四句で淨の常套的表現と推測されるが、その具體的意味内容は不明。これらすべての例が淨の登場詩であり、また、本劇、『三戰呂布』、『存孝打虎』がいずれもオスの蟹を嗤う内容だと思われる點からすれば、あるいは「窩囊廢」を揶揄したものかもしれない。

○拜堂—ここにいう「拜堂」は、『東京夢華錄』卷五「娶嫁」の條等に記述される、婚禮儀式としての「拜堂」ではなく、前文にいう「參拜堂上(堂上の父母に拜禮する)」の省文。　○(咧)

〔慪〕孤了―未詳。「咧孤」は、常識的には「撇古(いこじ・へそまがり)」に校訂すべきであろうが、ここは文脈上「撇古」では合わないように思われる。いま假に「咧孤」を「慪死」の誤りと考え、「悶死(息が詰って死ぬ)」と同意として譯出する。　○把來慣了―「把」は「守」、「慣」は「嬌慣」の「慣」。一緒に暮らして甘やかすこと。　○大東大西―小さくてかわいいものを「小東西」というから、その逆のことばとして「大東大西」というのであろう。偉い人・大物、というような意か。　○順父母言情呼爲大孝―成語。通常「言」は「顔」に作るが、『翫江亭』第三折や『西遊記』第三二回に「言」に作る例もあるので改めなかった。　○〔淨〕〔丑〕云　那箇叫〔那〕箇叫―この場面は二淨の「打諢」。したがって、本來「淨」を「丑」に改める必要はないが、後文で「淨」の片方が「丑」と表記されているため、改めることとする。以下同じ。江本・兪本がすでに同様に改める。また二度目の「〔那〕箇叫」は原文では二字のおどり字で表記される。文意から一字を補った。　○耳根臺子―耳もとをいう俗語。　○爛刀剁―前稿第二出に、淨の末に對する罵語としてすでに見える。前註參照。この出の第一曲【玉交枝】の後の丑のセリフにも、同じ表現が用いられている。　○〔噀〕〔撰〕―「噀」は「撰」の字形からくる誤りで、「撰」は「賺」と同音。だます・おだてる、の意。　○不長〔拨〕〔俊〕―罵語。甲斐性なし、の意。『清平山堂話本』「錯認屍」に「你這破落戸、千刀萬剮的賊、不長俊的乞丐」とある。　○五城兵馬―「五城兵馬司」の略稱。明・清代、北京等主要城市の五つの區劃(中城・東城・西城・南城・北城)の治安にあたった役職をいう。ここでは丑が自らを指していう。『醒世恆言』卷三六「蔡瑞虹忍辱報仇」に、「恰好五城兵馬經過、結扭到官、審出騙局實情」とある。　○總甲―明・清の制度で、百十戸を一里としてその一里をさらに十甲に分け、甲を總轄する者を「總甲」と呼んだ。甲内の治安も司る。ここでは、淨を指す。　○〔淨云〕―文脈上補う。　○只們―「只」は「這」の、「們」は「麼」の一聲の轉。「這麼」と同意。　○了當―「妥當」の意。(宋元)參照。　○劉老棍棒……光棍―「棍棒」は「光棍」と同意の罵語か。以下、「老棍棒」「幡竿」「擀面杖」「光棍」と、棒づくしのことば遊びになっており、實質的な意味はあまりないと考えた。なお「打眼」は、めざわり、の意。また、「二」は原文訛字。　○舅舅騎着你家老子放轡頭―『爭報恩』第一折に、丁都管が生旦の「舅舅」を馬鹿にして「不認得是舅舅、早是我不曾衝撞着舅舅、我着你老子放箇轡頭」というシーンがある。「放轡頭」は、惡しざまにあつかうことをいうのだろう。　○那箇和你一箇棒槌裏我墳―未詳。「那箇」は「哪箇」、「和你一箇」は「和你一樣」、「棒槌裏」は「由棒槌」の意とし、「我墳」は「臥墳」の誤りと考えて、ここでは假に、誰がお前と同じように毆られて墓に入るものか、と譯出した。　○我兒―「我兒」「我的兒」、ともに罵語。『漁

樵記』第二折その他には、妻が夫に「我的兒」と呼びかけるシーンがある。　○一（扶）〔狀〕―訴狀の量詞としては、他に「道」「批」等があるが、字形は「狀」が最も近いように思われる。江本・俞本も同様に校訂する。　○蠱毒（厭昧）〔魘魅〕―「厭昧」は「魘魅」。「蠱毒」「魘魅」ともに法律用語で、それぞれ毒殺と呪詛に當たる。『元典章』卷四一「刑部」（三）「諸惡」「不道」、『元史』卷一〇四「刑法志」（三）「大惡」の條等參照。　○（演）〔魘〕殃―前後の文脈からして「演殃」は「魘魅」をいい換えたもの。「演」を「魘」に校訂した（二字は同音）。「殃」は「禍」の意。　○偷嚵抹觜―盗み食いをして口をぬぐう。『金瓶梅詞話』第八六回に、潘金蓮の浮氣をあてこすって「更有一庄兒不老實、到底改不了偷饞抹嘴」という。　○你不曾做賊說謊―汲本では、この直前に相當するセリフとして［淨］我妹子閨門女兒、做甚麼歹事。［生］我劉知遠不曾做賊、怎麼寫休書與你」を置き、文脈がより自然である。江本・俞本は前文の「你那做妹子的」を「你那做妹夫的」に校訂する。「做賊說謊」は常語。四字で、盗みをはたらくふとどき、の意。『元典章』卷六「臺綱」（二）「體察」「改立廉訪司」の條に「官人令史每做賊說謊的不得知來」とある。　○供養妻子不和―汲本の相當部分は「養膳妻子不活」に作り、江本・俞本も「不和」を「不活」に校訂する。

譯

［淨が登場してセリフを言う］公明正大な天は欺くべからず。八匹の蟹が空を飛ぶ。ただ一匹だけが飛び上がれない。それもそのはずなんとそやつはオスの蟹。［笑うしぐさ］お笑いだ、お笑いだ。うちの兩親はやることがでたらめで、花や玉にも似た妹をやくざ者の劉に娶わせ、やつめに拜禮をさせたところ、やつのひと拜みで兩親は息を詰まらせて死んでしまいました。わたくしはいま、うちの女房を呼んで相談いたします。とにかくやつに離緣狀をかかせ、あのやくざ者を追い出してしまうのです。わたくしたち夫婦は財産を獨り占めにして樂しみ、あの女には家門につりあった男を捜し出して嫁に行かせれば、萬事めでたしめでたし。［呼ぶしぐさ］女房や、女房や。出て參りません。出てこないのも道理、子供の頃から言いかわした筒井筒、すっかり甘やかしてしまいました。目上の大切な人として呼びさえすれば返事をしてくれるでしょう。さて、なんと呼んだものか。「いとしいばっさま」と呼びましょう。わたくし、恐妻家ではありません。「父母の氣持ちに從うことを大孝という」というじゃありませんか。［笑うしぐさ］いとしのばっさま。［丑のセリフ］誰が呼んだ、誰が呼んだ。［淨のセリフ］息子がばっさまを呼んだのです。［丑のセリフ］やれやれ、神樣。用事があろうと無かろうと、いつもおっかさんの耳元で大騒ぎ。ぼろ刀で切られちまえ。どこにいるんだ。ちっ、ちっ。［淨のセリフ］おっかさん、あなたが

わたしをおだてあげて、息子をこんなに甲斐性なしにしてしまったのです。息子はあなたに三日もお會いしておりません。どうぞお座りください。三回叩頭いたしましょう。一回、二回、三回。丑のセリフ お立ち、お奉行所が岡っ引きを差し向けたんだ。淨のセリフ こんなにはやくお出ましいただけるとは。丑のセリフ あたしを呼び出して、いったい何のクソ用事だい。淨のセリフ あなたにお出ましを願ったのは、あの劉のやくざ者が兩親を拜み殺してしまったこと。今からあなたと相談して、計劃を練り、あのやくざ者を追い出してしまいましょう。丑のセリフ お前があいつを呼んで、やつに離縁狀を書かせてしまえばおしまいさ。そら呼んでおいで。淨が呼ぶしぐさ やくざもんの劉の棒野郎、ぴんと立った旗幟竿の、麺棒の、ええい、どっちにしたって目障りなごろつき棒め。生が登場してセリフを言う お義兄さんお義姉さんがお呼びだ。なんの用事でしょう。前に進み出てご挨拶をいたしましょう。お義兄さん、こんにちは。丑のセリフ ちっ、ちっ、お義兄さんはおまえの親父に馬乘りになって手綱をひくんだ。誰がおまえと一緒に洗濯棒で毆られて墓に入るものか。野郎、見損なうな。淨のセリフ お前、さあ、お白洲に出るか示談にするか、どっちだ。生のセリフ お義兄さん、お白洲とはどういうことで、示談とはどういうことですか。淨のセリフ お白洲というのは、お前を毒殺・呪詛の罪で訴えるのさ。生のセリフ お義兄さん、どうして毒殺・呪詛なのですか。淨のセリフ お前はおれの兩親を呪い殺しただろ。生のセリフ お義兄さん、示談とはどういうことですか。淨のセリフ 示談ってのは、三行半を一通書いておれの妹を離縁し、お前はどこへでも行っちまえってことさ。生のセリフ お義兄さん、あなたの妹さんは盗み食いをして口をぬぐったこともないし、あのあなたの妹にあたる人は盗みをはたらいてでたらめをいったりもしていないというのに、どうしてわたしに離縁狀を書かせたりするのです。淨のセリフ お前が盗っ人をしてごまかしてないだと。馬明王廟で鶏をくすねたくせに。生のセリフ お義兄さん、ほんの出來心をあげつらわないでください。淨のセリフ さあ今すぐに書け。書かねば毆る蹴るの目にあわせるぞ。生のセリフ 離縁狀を書かせるからには、下書きを書いてください。淨のセリフ なんて人を馬鹿にした奴だ。なんでおれが下書きを書かなきゃならない。しかたない、俺のいうとおりに書け。生が書くしぐさ 淨のセリフ 離縁の申立人劉知遠、生が書く 離縁の申立人劉知遠、と。淨のセリフ 妻と不和で、生が書く 妻と不和で、淨のセリフ 縁切りをして出て行きたく、生が書く 縁切りをして出て行きたく、淨のセリフ 決して身内に強要されてはおりません。生が書く 決して身内に強要

されてはおりません。淨のセリフ 泣くな。生が書く 泣くな、と。淨が笑う 奴め、「泣くな」まで書きやがった。そのことばは違う。塗り消すんだ。生のセリフ 「抹(塗り消す)」も書き足してしまいました。淨のセリフ そのうえ「抹」の字まで足しやがった。淨が殴るしぐさ 一から書きなおさなきゃだめだろ。一句一句はっきりと書いてくれ。

生唱

1【(玉抱肚)〔玉交枝〕】愁(年)〔拈〕(班)〔斑〕管。交我寫休書溢溢淚(連)〔漣〕。夫妻們(止)〔指〕望到老團圓。撇一撇滿懷愁萬千。畫一劃順交人心驚戰。怎書得休〔書字〕全。〔怎書〕得休〔書字〕全。

生白 (舊舊)〔舅舅〕、休書寫在(休)〔此〕間。淨云 靠後。拿來我看。老婆也、寫了休書在此。丑云 拿我看。我把你箇爛刀剁、碎刀刮、(二)〔挨〕冷鎗(攮)〔攮〕的。休書休書、要他做甚麼。有脚摸手印纔是休書。這箇休書、你家妹子一千年還是他的老婆。淨云 你怎麼(二)〔說〕的。丑云 我嫁老公、(二二)〔正正〕四十九箇了、死了你、我再嫁一箇、(棲)〔湊〕五十箇。管家官(二)〔鎮〕家兒都有了。淨云 我去叫他打脚摸手印。劉知遠、你怎麼不有〔打〕上脚摸手印。生云 (舊舊)〔舅舅〕、我頭也破了、爭這一箇諾。生唱

2〔【臨江仙】〕我愁多(願)〔怨〕多。爭奈打離書手摸。

淨云 你打上手摸了、我打上一箇脚摸了。丑云 老娘打上一箇股印。淨云 老婆、甚麼股印。丑云 是箇屁股印子。淨云 我的娘、打上一箇囫〔圇〕的不是。怎麼打上半箇。丑云 頓破了。趕出去。促風暴雨、不入寡婦之門。生云 (舊舊)〔舅舅〕做人、不要做盡印。

淨趕打 生下

韻 1—歡桓、天田韻。2—歌羅、姑模韻。

校記 1—汲本、始譜。 ○【玉抱肚】汲本【前腔】(【玉交枝】)、始譜【玉抱交】 ○「愁年班管」汲本「愁拈班管」、始譜「愁拈斑管」 ○「交我寫休書」諸本「展花箋」 ○「溢溢淚連」汲本「盈盈淚漣」 ○「夫妻們止望到老團圓」汲本「夫妻指望同百年。誰知付與花箋」、始譜「夫妻指望百年。誰知付與筆尖」 ○「撇一撇」汲本「畫一畫」、始譜「劃一劃」 ○「畫一劃」汲本「丟一丟」、始譜「撇一撇」 ○「順交人心」諸本「頓覺心」 ○「怎書得休全。得休全」汲本「怎寫得休書盡言。怎寫得休書盡言」、始譜「怎寫得休書字全。怎寫得休書字全」

註 ○【(玉抱肚)〔玉交枝〕】—汲本は本曲の前に【玉交枝】の曲を置き、本曲をその【前腔】とする。また始譜は本曲を引いて曲牌を【玉抱交】とする。汲本に従い曲牌を【玉交枝】に改めるが、【玉交枝】の格律からいえば、「夫妻們(止)〔指〕望到老團圓」の句の後に一

句の脱落があると思われる。　○撇一撇―はらいを一つ書くこと。後出の「畫一劃」も横棒を一本書くことであり、ともに書法用語。　○怎書得休〔書字〕全〔怎書〕得休〔書字〕全―「怎書得休〔書字〕全」の句は、格律からすれば七字句だと思われるので、始譜に従って「書字」二字を補った。次の句の「〔怎書〕得休〔書字〕全」は、原文ではおどり字三字だが、格律上疊句であるべきなので、四字を補った。　○(二)〔挨〕冷鎗〔攮〕〔攮〕的―俞本に従って校訂した。「冷鎗」は、人の虚につけこんで不意に危害を加えること。この場合は「挨冷鎗攮的」全體で、丑の淨に對する罵語。不意打ちを食らって死ぬがいい、といったほどの意。　○脚摸手印―離縁狀に手形を押す習慣は、『清平山堂話本』「快嘴李翠蓮記」の「今朝隨你寫休書、搬去粧匳莫要怨。手印縫中七箇字、永不相逢不見面」、『漁樵記』第二折の「左手一箇手模、正是休書」といった記述に見られ、清・翟灝『通俗編』巻一六「身體」「手印」の條は、黄庭堅『涪翁雜說』を引いて、その習慣が『周禮』からのものであることを述べる。また、民國・孫錦標『通俗常言疏證』「婦女」はその『通俗編』を引き、「古云『手摹・手印』、今云『手摹・脚印』、皆謂休妻的書也。俗語但以手脚連文耳、必無脚印之理也」という。後文で淨が脚印を押そうとするのは、「脚摸手印」の常語を承けた「打諢」である。　○你怎麼(二)〔說〕的―「二」は、原文訛字。江本は訛字のまま作り、俞本は「脱」に校訂する。「怎麼說」は、この場合は、どういうことだ、といったほどの意。　○(二二)〔正正〕四十九箇了―「二二」は、原文訛字。江本・俞本はともに「扯扯」に校訂する。訛字の字形は「扯」に近いが、「正」とすべきであろう。この「正」は「整」の略字。　○管家官(二)〔鎮〕家兒―「二」は、原文訛字。江本・俞本はともに「旗」に校訂するが、ここでは「管家官」と「二家兒」を同意だと考えて、「鎮」に校訂する。「管家官」は家僕をいい、單に「管家」ともいう。「官」は、主家を開府になぞらえるから「官」というのであり、「堂後官」の「官」と同様。「鎮家兒」も家僕、の意と考えたが、その用例を今のところ知らない。　○我頭也破了―未詳。後文の丑のセリフに「頓破了」とあるが、それは、この生の「我頭也破了」を承けての「打諢」だと考えた。したがってここでは、「頭」を「頓」の字形からくる誤りとして譯出する。「頓」は書法用語の「止め」。「我(頭)〔頓〕也破了」は、前文にいう「撇一撇」「畫一劃」を承け、「止め」のために離縁狀が破れたことをいうのではあるまいか。　○爭這一箇諾―「爭」は「差」の意。離縁狀が破れて、「諾(承諾する)」の文字が缺けてしまったことをいうのであろう。　○【臨江仙】―錢南揚『永樂大典戲文三種校註』(北京中華書局、一九七九)の「張協狀元」第二〇出校註(一一)は、【臨江仙】の句數を減じて【尾】に代用することがあることを論じて、「凡遇悲苦的戲情時、引子可作尾聲用」という。本シーンもこれに當たると考えて、【臨江仙】の曲牌名を補う。

○打離書手摸―「在離休書上打上手摸」の意であろう。　○頓破了―未詳。前註で述べたように、この丑のセリフは生の「我(頭)(頓)也破了」を承けての「打諢」ではあるまいか。ここでは、「頓」は「蹲」のしゃれと考え、「股印」を押そうとしてしゃがみ、そのためにズボンの股の縫い目が破れたものと解した。　○促風暴雨不入寡婦之門―成語。『漢書』巻九二「陳遵傳」に「禮に寡婦の門に入らず」、敦煌文書スタイン一九二〇『百行章』「愼行章」に「寡婦の門、由無くして往く莫かれ」とあり、『破窰記』第三折にも「可不道促風暴雨、不入寡婦之門」とある。　○盡印―未詳。原文のままでは意味をなさないと考え、「盡印」を假に「勁硬」として譯出した。

譯

生のうた

1【玉交枝】嘆きつつ筆をとる。離縁狀を書かされ涙はあふれてしとどに落ちる。夫婦共白髪を望んだものを。(離縁狀に)はらいをひとつ書くごとに胸は千々に亂れる。横棒を一本書くにつれて心はおののく。どうして離縁狀を書きおおせよう。どうして離縁狀を書きおおせよう。

生のセリフ　お義兄さん、離縁狀はここに書いてあります。

淨のセリフ　下がっておれ。持ってきて見せてみろ。女房や、離縁狀がここにある。

丑のセリフ　見せに來い。ふにゃふにゃ刀で切られても、小刀で抉られても死なない奴め、不意打ちを食らって槍に刺されるがいい。離縁狀、離縁狀、そんなものがあってどうする。拇印をついてこそ離縁狀というもの。この離縁狀ではお前の妹は千年たったってやつの女房さ。

淨のセリフ　どういうことだい。

丑のセリフ　あたしが嫁いだ旦那はきっちり四十九人、お前が死んでもう一度嫁に行けば、全部で五十人。その中には、家のきり盛りをするご家老だって番頭だっていたんだよ。

淨のセリフ　やつを呼んで拇印を押させるとしよう。やい劉知遠、お前はなぜ拇印を押さないんだ。

生のセリフ　お義兄さん、私は止めのところで紙を破ってしまい、「諾(承諾)」の字まで缺けてしまいました。

生のうた

2【臨江仙】憂いは多く恨みも多い。いかんせん離縁狀に拇印を押すことになろうとは。

淨のセリフ　お前が拇印を押せば、おれは脚の印を一つ押す。

丑のセリフ　おっかさんは股印を一つ押すよ。

淨のセリフ　おっかさん、股印とはなんだい。

丑のセリフ　尻の印のことだよ。

淨のセリフ　おっかさん、ちゃんと押さなきゃだめじゃないか、どうして半分しか押さないんだ。

丑のセリフ　止めで破れてズボンの股まで破れちまった。さあ、こいつを追い出してしまおう。突然暴風雨に遭ったって、寡婦の門には入るんじゃない

よ。生のセリフ お義兄さん、人としてごり押しはやめてください。 淨が追い出して殴る 生が退場する

淨叫 老婆、我和你看休書、只怕那里少一劃添些兒、少一點兒也添些兒。 旦搶了休書去了 旦唱

3【(玉抱肚)〔玉交枝〕】(你)叔叔荅救、訴不盡(閑言負屈)〔負屈唧冤〕。沒〔來〕由寫下休書、(去)將他卻打熬煎。天天天共乳同(二)〔胞〕不肯憐。鐵石人五臟心不善。止不住溢溢淚(連)〔漣〕。〔止不住溢溢淚漣。〕

旦白 叔叔、荅救荅救。 外上白 孩兒、因何在此鬧鬧炒炒。 旦白 叔叔、自從我爹爹死後、被我哥哥嫂嫂朝嗔暮打、逼勒丈夫寫下休書。 外白 孩兒、那箇這等。寫休書在那裏。 旦白 叔叔、休書搶得在此。 外 拿我看。咳、咳、咳。天殺天剮的、怎麼做這等營生。這弟子孩兒在那里。我刮劃他一場去。元來在這里。這箇沒家法的、打鼓迎藁薦、從來不曾見老婆正面坐、漢子傍邊站。噲。這厮這等無禮。人家的姪兒、見叔叔來去接去接、我叫着他(禮)〔理〕也〔不〕(禮)〔理〕。 淨 我的兒。便(禮)〔理〕你。 外白 你那老子和你那娘、見那劉知遠久後必有榮顯、因此上把你妹子招他爲婿。你如何在家鬧鬧炒炒、逼勒他寫下休書。 淨 叔叔、我莊農人家、鋤田耙(籠)〔壟〕、秋收冬藏。倒了油瓶也不扶、要他怎麼。趕他出去。 外 弟子孩兒。趕他那里去。久後要改(喚)〔換〕李家門閭里。 淨 他要做官、挑脚的、擡轎的也做官兒。 外 弟子孩兒、人不可(倪)〔貌〕相、海水不可斗(糧)〔量〕。你聽我說。

韻 天田韻。「救」は失韻。

校記 汲本。 ○【玉抱肚】汲本【玉交枝】 ○「你叔叔荅救」汲本「叔叔搭救」 ○「閑言負屈」汲本「負屈唧冤」 ○「沒由寫下」汲本「沒來由逼寫」 ○「去將他卻打」汲本「將他苦苦」 ○「天天天」汲本「天天」 ○「同二不肯憐」汲本「同胞不見憐」 ○「止不住溢溢淚連」汲本「止不住盈盈淚漣。止不住盈盈淚漣」

註 ○【(玉抱肚)〔玉交枝〕】―汲本は【玉交枝】とする。それに從う。末句「止不住溢溢淚漣」は【玉交枝】の格律に從って疊した。○(你)叔叔荅救―「你」は、汲本に從って衍字とすべきだろう。江本・兪本がすでに衍字としている。とすれば、第四句目の「去」も衍字とすべきである。 ○(閑言負屈)〔負屈唧冤〕―この四字は格律上ここで押韻するため、汲本に從い改めた。江本・兪本は「閑言」を「唧冤」に校訂するが語順は改めない。 ○沒〔來〕由―江本・兪本は、汲本に從って「沒來由」に校訂する。これに從う。 ○鐵石人五臟心不善―「人」を衍字として、「鐵石の五臟、心は不善」とよむべきであろう。汲本が同様に作るため、

改めなかった。　○叔叔荅救荅救―ふたつ目の「荅救」は、原文では二字のおどり字。江本・兪本は「叔叔荅救叔叔荅救」としている。　○天殺天剮的―罵語。「天殺的」は「該死的」と同意。（宋元）参照。「天剮的」も同意。　○弟子孫兒―罵語。「弟子」は、妓女を指し、「弟子孫兒」で、ててなしご、の意。（宋元）参照。　○這箇沒家法的―罵語。『清平山堂話本』「快嘴李翠蓮記」に「誰想娶這箇沒規矩、沒家法、長舌頑皮村婦」、『殺狗記』第一八出【急三槍】に「敗風俗、歹言語怎聽。沒家法、壞亂人倫」とある。　○打鼓迎藁薦―未詳。ここでは假に「藁薦」を乞食の持ち物とし、「太鼓を打って乞食を迎える」、すなわち、禮法にかなわぬ待遇をする、の意とした。　○漢子―ここでは「老婆」の對語として、「丈夫」の意。　○去接去接―原文では、二度目の「去接」は二字のおどり字。江本・兪本はともに「去接送」に校訂する。　○我的兒―罵語。前出の「我兒」と同様。　○因此上―「因此」に同じ。金元時代の白話資料に頻見される。　○倒了油瓶也不扶―常語。『紅樓夢』第一六回に「錯一點兒他們就笑話打趣、偏一點兒他們就指桑說槐的抱怨。坐山觀虎鬬、借刀殺人、引風吹火、站乾岸兒、推倒油瓶不扶、都是全掛子的武藝」とある。　○人不可(倪)〔貌〕相海水不可斗(糧)〔量〕―成語。『小尉遲』第二折に「古語有云、凡人不可貌相、海水不可斗量」とある。

譯

淨が呼ぶ　おっかさんや、おれとおまえが離縁狀を讀んで、どこか筆畫が少なければ足せばいいし、點が少なくても足せばいいだろう。　旦が離縁狀を奪い去る

旦のうた

3【玉交枝】叔父さんどうかお助けください、はらせぬこの恨みをいい盡くすことができません。いわれもなく離縁狀を書かせ、あの人につらい思いをさせております。ああ神様、同じ乳で育った實の兄だというのに情けさえかけてはくれません。鐵や石の五臟・心根までひどい人。あふれる涙を止めることもできません。あふれる涙を止めることもできません。

旦のセリフ　叔父さん、どうぞお助けください。　外が登場してセリフを言う　むすめや、どうしてここで騒いでおるのだ。　旦のセリフ　叔父さん、わが父が亡くなってから、兄と兄嫁に夫は朝には叱られ暮にはぶたれ、無理やり離縁狀を書かされたのです。　外のセリフ　むすめや、誰がそんなひどいことを。離縁狀はどこにある。　旦のセリフ　叔父さん、離縁狀は奪い取ってここにあります。　外のセリフ　見せてみなさい。ああ、ああ、ああ。死に損ないの罰當たりめ、どうしてこんなひどいことをするんだ。あの馬鹿野郎はどこにいやがる。わしが奴の始末をつけてやる。なんとこんなところに

いたのか。恥知らずめ、太鼓を打って乞食を迎えやがって。女房が正面に坐り、亭主が傍らに立っているなんてみたことがないぞ。はあ。こいつめなんと無禮な。ひと様の甥っ子は叔父が來るのをみたら出迎えるのに、うちの甥っ子はわたしがよんだって相手もしやがらない。[淨のセリフ] 野郎、すぐに相手をしてやるよ。[外のセリフ] おまえの親父とおっかさんは、その劉知遠が後々必ず出世するだろうと見て、それがためにお前の妹の入り婿としたのだ。おまえはどうして騒ぎ立てて、彼に無理やり離縁狀なんぞ書かせるのだ。[淨のセリフ] 叔父さん、我等田舍の百姓は田を耕し畝を作り、秋に收穫して冬に貯えるもの。油瓶が倒れても起こそうとしないしないやつなんかいるものか。あいつを家に入れてどうする。追い出してしまえ。[外のセリフ] この馬鹿野郎。彼を追い出してどこへ行かせるのだ。しばらくしたらきっとわが李家の家名をあげてくれるだろう。[淨のセリフ] あいつが役人になれるんなら、人足だって、かごかきだって役人になれるさ。[外のセリフ] この小僧、人は見かけによらぬもの、海の水は斗ではははかれない、というではないか。まあわたしのいうことをききなさい。

[外唱]

4【石榴花】我哥哥眼裏識賢人。

[淨白] 孔夫子三千徒弟子、七十二賢人。不曾出一箇賢人。[外唱]

情願將女結爲親。他暫時落薄暫時貧。你在家休得要爭競。

[外白] 弟子孩兒、你和他相爭鬧(少)〔炒〕、隣舍家也笑語。[唱]

被鄉隣知道作話文。大家榮顯李(出)〔莊〕門。[淨唱]

5〔【前腔】〕叔叔今且聽元因。非是姪兒怒生嗔。那討閑飯(春)〔養〕閑人。又不會鋤田車水(會)〔與〕耕耘。他夫妻們在家(里)〔長〕歡慶。交他寫下休書退了親。

[旦白] 哥哥、退了親、退了親、我身邊有半年身孕。如何是了。虧哥哥下辦的。[淨白] 下辦的、上班的、又來也。你那懷里的是太子子太兒。叫一箇老娘婆買些(段)〔斷〕腸草・兎絲頭。喫了(二)〔藥〕打下了。[淨唱]

叫一箇老娘婆落了他身懷孕。

[外白] 他人後有發跡之時。[淨白] 他若得發跡、我發箇大呪。[淨唱]

他還發跡爲官後、黃河只得水澄清。[(淨)(丑)唱]

6〔【前腔】〕公公在日不識人。山鷄怎比鳳凰群。到不如我家馬牛和羊犬。他還發跡爲官後、

[(淨)(丑)白] 奴家也發箇大呪。[(淨)(丑)唱]

奴做一條(二二)〔蠟燭〕照乾坤。

韻 眞文、庚亭、天田韻。

校記 4—汲本、始譜。　○「哥哥眼裏」汲本「哥哥眼內」、始譜「哥眼內」　○「將女結爲親」汲本「將伊妹子結成親」、始譜「將伊妹子結爲親」　○「落薄」始譜「落泊」　○「你在家休得要爭競」汲本「你們休得閑爭論」、始譜「你們休得閒爭論」　○「被鄉隣知道作話文」汲本「被傍人聞知作話文。大凡事須要相和順。劉郎發跡爲官後」、始譜「被隣人知道作話文。大凡事須要相和順。他還發跡爲官後」　○「榮顯」汲本「榮耀」、始譜「榮擢」　○「李出門」諸本「李莊門」

5—汲本、成譜。　○【前腔】汲本【前腔】、成譜【石榴花】

○「叔叔今且聽元因。非是姪兒怒生嗔」諸本「非因小姪怒生嗔」

○「那討閑飯春閑人」汲本「那得閑衣閑飯養閑人」成譜「那得閒衣閒飯養閒人」　○「會耕耘」諸本「與耕耘」　○「他夫妻們在家里歡慶」諸本「夫妻兩口長歡慶」　○「交他寫下」汲本「因此上逼他寫下」、成譜「因此逼寫」　○「一箇老娘婆」汲本「一箇收生婆」、成譜「箇收生婆」　○「懷孕」諸本「孕」

○「他還發跡爲官後」汲本「劉窮若是身發跡」、成譜「㊀劉窮若是身發跡」　○「黃河只得」諸本「直待黃河」

6—汲本。　○【前腔】汲本【前腔】　○「在日」汲本「前日」

○「山鷄怎比鳳凰群」汲本「山鷄怎逐鳳凰群。又沒家舍又身貧」

○「到不如我家馬牛和羊犬」汲本「卻不如馬力共牛筋。那些箇半斤逢八兩門。傍人恁般行徑」　○「爲官後」汲本「爲官日」

○「奴做一條二二」汲本「做枝蠟燭」

註 ○【石榴花】—格律上、一曲目は「被鄉隣知道作話文」の後に二句の脱落があり、三曲目は「山鷄怎比鳳凰群」の後に一句、「到不如我家馬牛和羊犬」の後に二句の脱落があると思われ、諸本にはそれらの句が補われている。二曲目に關しては、第一句「叔叔今且聽元因」が諸本に無く、成譜は最後の二句を合唱とする。校記參照。　○孔夫子三千徒弟子七十二賢人不曾出一箇賢人—『史記』卷四七「孔子世家」に「孔子 詩書禮樂を以て教え、弟子は蓋し三千、身 六藝に通ずる者は七十有二人なり」とあるのを踏まえた表現。なお、早くは敦煌文書ペリオ三一四五・三七九七・三八〇六に見られる「上大夫、丘乙己。化三千、七十二(一一は「士」にも作る)」で始まる文句は、唐宋以來、童子が初めて手習いをする際に書く文句であったといい(涵芬樓本『說郛』卷六○所引、宋・陳郁『藏一話腴』等參照)、『琵琶記』第一七出等、戲曲文學中にも散見される。「不曾出一箇賢人」は、ここでは反語と考えた。　○話文—「話本」と同意。物語・話、の意。『張協狀元』第一出に「似恁唱說諸宮調、何如把此話文敷演」とある。　○李(出)(莊)門—諸本に從って校訂した。　○聽元因—常語。眞文韻を常用する說唱詞話の押韻句末に頻見される

表現。「元因」にはさほど大きな意味はなく、單に、話を聞け、といったほどの意。　○那討閑飯(春)〔養〕閑人―諸本により、「春」を「養」に改めた。成化本『白兎記』第三三葉a【三學士】にも「一世爲人只在勤、那討閑飯養你身」という曲辭が見られる。「閑人」は、宋・耐得翁『都城紀勝』「閑人」の條に「但そ業次に著かずして、閑事を以て人に食さるる者なり」という。○又不會鋤田車水(會)〔與〕耕耘―諸本に從い、「會」を「與」に改めた。　○他夫妻們在家(里)〔長〕歡慶―諸本に從い、「里」を「長」に改めた。　○下辦的―「下」は「忍」の意。(匯)參照。　○下辦的上班的―旦の「虧哥哥下辦的」を承けた「打諢」で、「班」は「辦」のしゃれ。　○太子子太兒―「子太兒」は待考。ここでは假に衍字とみなした。　○叫一箇老娘婆買些(段)〔斷〕腸草兎絲頭喫了(二)〔藥〕打下了―「老娘婆」は產婆。(漢)參照。「斷腸草」は、猛毒を持つとされる草「鈎吻」の異名であり、『本草綱目』卷四「產難」「墮生胎」の條に、その別名である「野葛」が擧げられている。「兎絲」は、『文選』卷二九「古詩一九首」第八首に「君と新婚を爲し、兎絲女蘿に附く」とあるように、本來夫婦の契りを象徵する草だが、「兎」は「吐」と音通であり、兎が妊娠中に食するのを禁じられた動物であることから(『本草綱目』卷五一「兎」の條參照)、「兎絲頭」が墮胎藥として用いられていたものと思われる。「二」は原文訛字、文脈により「藥」に改めた。江本・兪本がすでに同樣に校訂する。「打下」は、墮ろす、の意。　○他人―「他人」を「他」の意味で用いる例が、本テキストでは散見される。　○他還發跡爲官後黃河只得水澄清―「還」は、もし、の意。(匯)參照。「後」は「呵」の一聲の轉。前稿第五出「怪哉後怪哉後」の註參照。黃河の濁流が澄む、というのは、『宋史』卷三一六「包拯傳」に「人 包拯の笑うを以て黃河の清むに比す」とあるように、極めて稀有なことの喩え。現實では起り得ないことの喩えとして、『樂府詩集』卷一六「鼓吹曲辭」(一)所載「漢鐃歌」古辭「上邪」詩が「江水 爲に竭く」といい、敦煌曲子詞【菩薩蠻】(スタイン四三三二)が「黃河の底に徹(いた)るまで枯る」というのと同種の表現である。なお、淨のこの文句を踏まえたやりとりが、本テキストの最後に展開されている。　○奴做一條(二二)〔蠟燭〕照乾坤―「二二」は原文訛字。汲本によって校訂した。自らの身を燒いて燈明とした、という話柄が、佛陀の本生譚として『賢愚經』卷一、『太子成道經』(敦煌文書ペリオ二九九九)等に見られ、ここの表現は、この出の後文にいう「通身照了天地」とともに、佛教說話の影響を思わせる。なお、丑のこの文句も、本テキスト最終出の伏線となっている。

譯

外のうた

4【石榴花】我が兄は賢人を見抜く眼を持ち。

淨のセリフ　孔子さまのもとには三千人の弟子・七十二

人の賢人がいたんだ。賢人ぐらいどこにだっている。

外のうた

娘を縁組させることを心から望んでいた。劉知遠は落ちぶれたかと思えばまた貧乏。おまえは家で彼と張りあうでない。

外のセリフ この馬鹿野郎、お前が彼と騒ぎ立てれば、隣近所のいい笑いものだぞ。外のうた

近所の連中に知られたら話の種になってしまう。いずれ李家荘が栄えるものを。浄のうた

5【前腔】叔父さんちょっときいてくれ。この甥っ子だってむやみに腹を立てている譯ではない。どうして無駄飯をせびって遊び人を養わなければいけないんだ。あいつは田を鋤き踏み車で水を汲み上げることもできなければ耕すことだってできやしない。奴ら夫婦は家でずっと楽しんでいるだけなんだ。離縁状を書かせて婚姻を取り消してしまうに限る。

旦のセリフ 兄さん、婚姻を取り消す、取り消すっていったって、私はもう身ごもって半年になるんですよ。一體、どうしろというの。兄さんがこんなにもむごい仕打ちをするなんて。浄のセリフ 仕事をしないだとか、するだとか、またそんな話かよ。お前の腹の中にいるのは、太子さまだってわけだ。産婆に斷腸草とネナシカズラを買わせよう。藥を飲ませて腹の中にあるものを流させよう。浄のうた

産婆にあいつの胎兒を堕ろさせよう。

外のセリフ 彼は後に出世するぞ。浄のセリフ 奴が出世できるというのなら、俺はどでかい誓いを立ててやる。浄のうた

奴がもし出世して役人になれたなら、黄河の濁流だって澄み清まるに違いない。丑のうた

6【前腔】お義父さんは生前人を見る目がなかった。キジがどうして鸞鳳と並び飛ぶことができよう。うちの家の牛馬や羊や犬にも及びやしない。彼がもし出世して役人になれたなら、

丑のセリフ 私もどでかい誓いを立ててやろう。丑のうた

一本の蠟燭になって天地を照らしてあげるわ。

外白 我把你箇潑婦、這誓明日都要還里。(浄)(丑)白 叔叔、通身照了天地罷了、該死不成也。外白 孩兒、我和你家去、不要和他搬嘴。(外白)宿世做夫妻。何須苦執迷。情知不是伴、孩兒、我和你家去、事急且相隨。並下 (浄)(丑)白 事急且相隨、你可是箇說觜的老烏龜。浄白 老婆、怎麼好。干做了一場辦派、休書着那(了)〔丫〕頭搶了去了、又着叔叔罵了一頓、如今怎麼計較。(浄)(丑) 如今拏三錢銀子、去

上角頭拘掯衚衕丘生藥家、買些巴豆人言(鬧)(腦)子、碾成一服、茶里不着飯里着、把這光(杞)(棍)藥死了罷。興不的詞、告不的狀。[淨白]老婆、不好。你弄、我着那做城長官拿住、拿到背(淨)(靜)去處、與一箇仙人指路燕兒飛、就認了、拿到西角頭、坐西朝東、綁將起來、(膊)(脖)子里(掙)(插)一面招旗「犯人李弘一毒藥殺人」、劊子提刀一下、要了頭又要充軍。[淨][丑][白]要了頭、怎麼又要充軍。[淨](二)(說)成化年折例不好。我有一計、如今離家五里上高之地、臥童白有(二)(一)瓜園、四十畝寬遠、裏頭出一瓜精、每年爹娘在時、按四季祭賽、不傷人命。自從我爹媽死後、(元)(無)人祭賽、喫的買瓜賣瓜人、路絕人稀。如今叫他出來、哄他、把家財和他三分分了、分外與他瓜園、你與他冷酒喫、我與他熱酒喫、灌的他醉了、交他不(安)(要)與三姐說、交他逕去瓜園內去、若是去到那里、一更盡(事)(時)、二更悄然、正遇三更時候、撞着那瓜精、兩手撕作兩半、生生喫了、興不的詞、告不的狀。老婆老婆、好麼。[淨][丑]老公、好計好計。將來做事、計就月中擒玉兎、謀成日裏捉金鷄。好老婆、好漢子。[並下]

註 ○這誓明日都要還里―「還」は、「還願」の「還」。　○該死不成也―「也」を衍字と考え「你說我該死不成」の意として譯出した。　○搬嘴―「搬弄是非」の意。(漢)參照。　○[外][白]宿世做夫妻……事急且相隨―「[外][白]」は衍字。「宿世做夫妻、何須苦執迷」「情知不是伴」「事急且相隨」の四句は、退場詩。「情知不是伴」の後の「孩兒、我和你家去」を、江本・兪本は全て衍字だと見なしているが、ここでは韻文中に插入された一種の入れゼリフであると解した。詩の前半部分は生と旦、後半部分は淨と丑の夫婦を指すか。「情知不是伴、事急且相隨」は成語。例えば『張協狀元』第二〇出や『拜月亭』第一九出などに見える。ここでは、淨と丑を「露水夫妻」とあてこすったもの。　○烏龜―罵語。「王八」と同意。　○辦派―「辦」は吏牘語で、稅金等を集める、そろえる、の意。「派」は「差」と同意。離緣狀をとることを役人の集金にたとえた「打揮」であろう。○上角頭拘掯衚衕―「角頭」は「角落」の意。(漢)參照。「拘掯」は未詳。おそらく疊韻語であるから、何か特別なニュアンスがあるかもしれない。　○巴豆人言(鬧)(腦)子―「巴豆」はハズの樹の實、「人言」は「砒霜(ヒ素)」、「腦子」は「龍腦香(龍腦香樹から取れる油脂の結晶)」のこと。『黑旋風』第四折【十二月】に「他怎知道下的有砒霜巴豆、但喫着早麻撒撒、害得箇魄喪魂丟」、宋・文天祥『文山全集』卷一四「臨江軍」詩の跋に「予嘗て腦子二兩を服すも死せず、絕食すること八日なるも又た死せず」、『宣和遺事』後集に「是時止有趙妃當寵、累欲以陰計中金主、以雪國恥。又因暑月、常以冰雪調腦子以進、因此金主亦疾」とあるように、「巴豆」「人言(砒霜)」「腦子」には、いずれ

も毒性がある。　○背(淨)〔靜〕―江本・兪本に従って校訂した。「背靜」は、辺鄙な、の意。　○仙人指路燕兒飛―「仙人指路」と「燕兒飛」は拷問用語。「仙人指路」は、『西遊記』第七二回に「衆人按住、將繩子捆了、懸梁高吊。這吊有箇名色、叫做仙人指路。原來是一只手向前、牽絲吊起、一只手攔腰捆住、將繩吊起、兩只脚向後一條繩吊起、三條繩把長老吊在梁上、卻是脊背朝上、肚皮朝下」とある。また「燕兒飛」は、『明史』巻九四「刑法志」(二)に「酷吏輒(みだ)りに挺棍・夾棍・腦箍・烙鐵、及び一封書・鼠彈箏・攔馬棍・燕兒飛を用う」とあり、刑具の一種だと思われる。　○(挿)〔插〕―江本・兪本に従って校訂した。　○招旗―「招」は「招供」の「招」。「招旗」で自白狀を旗にしたものをいうのであろう。　○(二)〔說〕成化年折例不好―「二」は、原文訛字だが、字形から判断して「說」字に校訂した。なお、江本・兪本はこれを衍字だと解しているようである。「折例」は吏牘語。「折」は換算の意で、「折例」は米等の現物をお金に換算するレート。「折」については、『吏學指南』「諸納」「折納」の條に「本色を缺きて、別物を以て折納する者を謂う」とある。ここは、税金の換算率の用語を、罪に對する刑罰の比重に用いてお上の非道をあてこすったもの。「不好」には誤りを含む可能性もある。　○臥童白―未詳。江本・兪本は汲本に従って「臥牛岡」に校訂する。　○一更盡(事)〔時〕二更悄然正遇三更時候―常語。『紅梨花』第三折に「到這一更無事、二更悄然、到那三更前後、起了一陣怪風……」、『殺狗記』第六出に「到鐵鋪里去打一把快刀、一更無事、二更悄然、三更時候、把孫二來一刀殺了」とある。　○計就月中擒玉兎謀成日里捉金鷄―成語。『襄陽會』第一折、『小孫屠』第一六出等に「計就月中擒玉兎、謀成日里捉金烏」とあるように、この成語は普通は「兎」「烏」で押韻するのだが、本テキストでは、前後の「計」「事」「子」と押韻するため、「鷄」字が用いられているものと思われる。

譯

外のセリフ　このアバズレめ、この誓願にはいずれお禮參りをするからな。丑のセリフ　叔父さん、全身で天地を照らせばいいんでしょ。死ねってわけだ。外のセリフ　むすめや、わしと一緒に家に歸ろう。口げんかはするでない。前世からの縁をもった夫婦なのだから、そうひどく依怙地に爭う必要はない。似合いの仲ではないと知ればこそ、むすめや、一緒に歸ろう、急場しのぎにしばらくは連れ添う。外と旦がともに退場する　丑のセリフ　「急場しのぎにしばらくは連れ添う」だとさ。あいつほんとにお喋りのうすのろ野郎。淨のセリフ　女房や、どうすればよいのだろう。税金集めに行って手ぶらで歸ってきたようなもんさ。離縁狀はあの小娘に奪われてしまい、そのうえ叔父さんにはひとしきり叱られる始末。今度はどんな策でいこうか。

丑のセリフ いま銀三錢を持って、あっちの角の方にある横丁の丘の生藥屋に行き、ハズの實と砒素と腦子を少しばかり買ってきな。すりつぶして、茶の中ではなくて飯の中に盛ってやれば、あのやくざ者も死んで終わりだよ。訴訟も起こせないし、訴えることもできやしない。 淨のセリフ 女房や、そりゃまずい。町のお役人に捕らえられ、暗いところに連れて行かれ、「仙人が路を指し、燕が飛ぶ」ってやつで吊されれば、白狀してしまう。白狀してしまえば西の隅に連れて行かれ、西に坐って東を向き、體を縛り上げられた上に、「犯人李弘一は毒殺せり」なんて自白狀を首に立てられてしまう。首切り役人が刀をさっと引抜きでもしようものなら、頭は取られるは從軍はさせられるはだ。 丑のセリフ 頭を取られて、どうして從軍までさせられるんだい。 淨のセリフ 成化年の換算レートはむちゃをする。俺に一計がある。いま家から五里離れた高地の臥童白に瓜畑があって、広さは四十畝、その中には瓜の化け物が出るのだ。毎年、兩親がいたときには四季のお祀りを行っていたから、人命を傷つけることはなかったが、俺の兩親の死後は祭事をするものがなく、瓜を賣買する人たちを食べてしまい、道行く人もいなくなってしまった。いまあいつを呼んで來て、おだてて家財をやつと三分し、分け前の他に瓜畑も與えるのだ。そしてお前はあいつに冷や酒を飲ませ、俺があいつに熱燗を飲ませ、醉いつぶしてしまおう。三女には話すなといってあいつをそのまま瓜畑へ行かせよう。そこに着こうもんなら「一更が過ぎて、二更になってひっそり、三更になった頃には」ってやつさ。あの瓜の化け物に出くわし、兩手で半分に引き裂かれ、生のまま食べられっちまうんだ。奴は訴訟も起こせないし、訴えることもできやしない。女房や、どうだい。 丑のセリフ あんた、妙計よ妙計よ。將來事をなす場合「計劃が預めしっかりしてさえいれば、月中に玉兎を捕まえ、太陽で金鷄を捉えることすらできる」というやつね。我らはよい女房とよい亭主。 どちらも退場する

第八出 〔生、旦〕

生上白 舅舅(舊)〔舅〕母回心轉意、把家財三分分了。一分三叔公、一分(舊舊)〔舅舅〕(舊)〔舅〕母、一分我夫(婆)〔妻〕兩口兒、分外又與我瓜園一所。(舊舊)〔舅舅〕(舊)〔舅〕母又與我(已)〔幾〕盃酒喫、我不覺的醉將上來了。(舊舊)〔舅舅〕叫我往瓜(二)〔園〕里去看瓜、交我不要與三姐說。我夫妻家如何不說。便不說也罷。家中有(獲)〔護〕身龍棒、可要取(公)〔去〕。不

免叫三姐一聲。三姐、三姐。【旦上白】關門屋里坐、禍從天上來。(如)(奴)家在繡閣之中悶(坐)、只聽的門前大呼小叫、我道是誰、卻是丈夫劉知遠。那里喫的薰薰大醉。生死只爲這酒。我那哥哥嫂嫂見了、不是那打、便是那罵。罷、本待不(伏)(扶)他家去、一夜夫妻百夜之恩。不免叫他一聲。【做扶科】劉知遠。【生】娘娘、我喫不的了。【旦】呸、我是三姐。【生白】三姐扶我起來、我醉了。【旦白】那里喫酒來。【生白】你哥哥嫂嫂與我酒喫來。【旦白】我哥哥嫂嫂見了你眼中疔肉中刺、如何與你酒喫。【生】你哥哥回心轉意了。把房屋三分分了、一分三叔、一分哥嫂、一分我夫妻二人、又與我酒喫。三姐、你拿我(獲)(護)身龍棒來。【旦白】你醉了、這早晚那里去。不是(要)(耍)處、你去臥房中歇了罷。【生白】娘子、我不歇、你好歹與我(取)這棒去。【旦白】你那去。【生】你哥嫂交我不要與你說。【旦白】不要與你說。必是歹意。好歹與奴家說。【生白】交我瓜園中看瓜去。【旦叫】(大)(天)呀、元來我哥哥嫂嫂害你、瓜園中有鬼。【生】呸、婦人家(當)(常)言道老婆婆去曾的門破我。當元前、不說是鬼、萬事皆休、說起這鬼來、把我的酒盡皆散了。豈不聞昔日漢高祖、姓劉名季、乃徐州沛縣人也、因往芒(蕩)(碭)山過、見一木牌上書一行大字道「山中有千(火)(尺)大(莽)(蟒)、行客可以避之」。劉季醉而言曰「壯士行程、何以避之、不免逕逕」。當先果見千尺大(莽)(蟒)逕逕劉季、季側身躲過、一劍揮之兩截、後來做到帝位。他是劉季、我是劉(皐)(曷)。倘若我前程有分、降了瓜精。三姐、不强似死在你哥哥嫂嫂手(不)(下)。放了手、我去。【旦白】我便死也不放你去。

註 ○關門屋里坐禍從天上來—成語。『朱子語類』卷七一「易」(七)「无妄」の條に「諺曰、閉門屋裏坐、禍從天上來」とあり、『金鳳釵』第三折【牧羊關】には「俺正是閉門屋裏坐、禍從天上來」とある。　○在繡閣之中悶(坐)—江本は「悶」の後に一字の空格を補う。ここでは、文脈より「坐」を補った。　○生死只爲這酒—「生也只爲……、死也只爲……」の意であろう。○娘娘—原義は、おかあさん。高貴な女性に對する尊稱。○眼中疔肉中刺—常語。『新五代史』卷四六「趙在禮傳」に「眼中に釘を拔けば、豈に樂しからずや」とある。「眼中疔」は、元來は「眼中釘」であろう。『劉知遠諸宮調』第二【般涉調】【麻婆子】に「去了俺眼中釘、從今後好快活」、『陳州糶米』第一折に「我見了那窮漢似眼中疔、肉中刺、値箇甚的」とある。『通俗編』卷一六「身體」參照。　○婦人家(當)(常)言道老婆婆去曾的門破我—待考。ここでは假に「婦人家常言道老婆婆舌頭的。悶破我」と校訂して譯出した。なお、「老婆舌頭」はおしゃべりをいう常語。　○當元前—「當初」ないし「當元」と同意。前稿第二出の註參照。　○豈不聞……帝位—漢の高祖が大蛇を斬ったという話は、『史記』卷八「高祖本紀」に基づく。同書によれ

ば、「芒碭山」（正確には「芒碭山澤巖石之間」。「芒」「碭」は縣名）は、高祖が秦始皇帝による捕縛を恐れて身を隠した場所であり、本來その地と大蛇の逸話とは無關係であるが、『前漢書平話續集』巻上、『兩漢開國中興傳誌』巻一、『全漢志傳』「西漢」巻一では、成化本『白兎記』同様、「芒碭山」において高祖が蛇を斬ったことになっており、『前漢書平話續集』では「芒碭山」を「芒蕩山」に作る。ただし、それらの小説類には、警告文の書かれた「木牌」は登場しない。

譯

生が登場してセリフを言う 義兄さん義姉さんは改心して、家財を三つに分けました。ひとつは三番目の叔父上、ひとつは義兄さん義姉さん、ひとつは私たち夫婦に分け、さらに私に瓜畑までくれました。義兄さん義姉さんはそのうえ酒まで振る舞ってくれたので、うっかり酔っぱらってしまいました。義兄さんは私に瓜畑の見張りに行かせ、三女にはいうなといいますが、私たちは夫婦、どうしていわないでおられましょう。いうなとあらばいわずにおくが、護身用の龍棒が家の中においてあるから、取りに行かねばなりません。三女を呼びましょう。三女、三女。

旦が登場してセリフを言う 門を閉ざして家の中にいても、禍は天からやってくる。私がお部屋の中で悶々としておりますと、聞けば門の前で大騒ぎ。誰かと思えば、なんと夫の劉知遠。どこでこんなになるまで飲んできたんでしょう。とにかくお酒に目がない人。お兄さん兄嫁さんに見つかれば、打たれるか罵られるかするでしょう。しかたない、助け起こしに行きたくはないけれど、これも「一夜の夫婦も百夜の恩」。呼び起こしてあげましょう。助け起こすしぐさ 劉知遠。生のセリフ 奥方さま、私はもう飲めません。旦のセリフ ちっ、私は三女です。生のセリフ 三女、私を起こしてくれ、酔っぱらってしまった。旦のセリフ どこで飲んだのです。生のセリフ 義兄さん義姉さんが飲ませてくれたんだ。旦のセリフ 私の兄さん兄嫁さんはあなたを「眼の中のいぼ、肉の中の棘」みたいに思っているのに、あなたに酒なんか飲ませるものですか。生のセリフ お義兄さんは改心して、家財を三つに分け、ひとつは三番目の叔父上に、ひとつは義兄さん夫婦に、ひとつはわたしたち夫婦にということで、そのうえ私に酒まで振る舞ってくれた。三女、護身用の龍棒を持ってきておくれ。旦のセリフ 酔っているのに、こんな時分にどこへ行くというの。冗談ではありません。部屋へ戻ってお休みなさい。生のセリフ 若奥さま、私は寝ません。とにかく棒を取ってきてくれ。旦のセリフ どこへ行くのです。生のセリフ 義兄さん義姉さんにいうなといわれた。旦のセリフ いうな、ですって。きっと悪い考えだわ。とにかく私に話してください。

生のセリフ 私に瓜畑の見張りに行けというんだ。 旦が叫ぶ あれまあ、兄さん兄嫁さんはあなたを殺すつもりです。瓜畑には幽鬼が出るのよ。 生のセリフ ちっ、女って奴はくだくだといつもつまらぬことばかりをいう。わずらわしい。幽鬼と聞かなければすんだものを、幽鬼と聞いた以上は、酔いもすっかり醒めてしまった。お前も知っているだろう。その昔、漢の高祖は姓を劉、名を季といい、徐州沛縣の人だったが、芒碭山を通った時に、木の板に大きな字で一行、「山中に千尺の大蛇有り。行客はこれを避くるべし」と書いてあるのを見た。劉季が醉っていうには、「壯士が道を行くに、何ぞ蛇など避けようか。ただ直進あるのみ」と。そのとき果して前方に千尺の大蛇が現れ、劉季に飛びかかってきたが、彼は身をかわしてそれを避け、一太刀振るえば大蛇はまっぷたつ。後に彼は帝位にまで上りつめた。彼の名は劉季、私の名は劉鬲。もし、私が出世の運に恵まれているのなら、瓜の化け物を倒すこともかなうはず。三女よ、義兄さん義姉さんの手にかかって死ぬよりましではないか。手を放せ、俺は行く。 旦のセリフ たとえ死んでも放しません。

生唱

1【一江風】你婦人家。你說這般驚人(活)〔話〕。神鬼事吾不怕。我爲人、稟着天地神靈、生長(我)在三光下。平生不信(相)〔邪〕。〔平生〕不信(相)〔邪〕。心平好去也。(總)〔縱〕有鬼吾不怕。 旦唱

2〔【前腔】〕後生家。說這般過頭(語)〔話〕。神鬼事誰不怕。怕你五行差。

旦白 丈夫、將(已)〔幾〕箇古人比並你。 生白 娘子、你婦人家、三(柳)〔綹〕梳頭、兩接穿衣、女流之輩、曉的甚麼今人古人。(是)〔試〕說我聽。 旦唱〔白〕 (【一江風】)你不記的(樵)〔梅〕嶺(有)〔陳〕辛。 生白 我道你說誰、元來是陳巡檢梅嶺失妻。他運遭愚魯、我劉知遠是有德之人、焉能比我。 旦白 還有一箇古人。 旦唱 有一箇李(保)〔寶〕逢金天、此事眞無假。我哥哥使計策。〔哥哥〕使計策。奴家苦恨他。怕身死在瓜園下。(身死在瓜園下。)

生白 娘子、放手、我去。 旦白 便死也不放你去。 生白 眞箇不放。 倣推倒科 生白 何妖怪何妖怪、(總)〔縱〕有鬼吾不怕。 〔生〕下 旦唱

3【(一江風)〔臨江仙〕】別時容易見時難。夫婦生(折)〔拆〕散。惟有我孤單。

〔白〕一夜枕邊都是淚、來朝清早看分明。 下

韻 1・2—家麻、車蛇(策)、歌羅韻。3—干寒韻。

校記 汲本。 ○「婦人家」汲本「是箇婦人家」 ○「你說」

汲本「說」　「驚人活」汲本「輸機話」　○「事吾」汲本「偏」　○「稟」汲本「頂」　○「神靈」汲本「神明」　○「我在」汲本「在」　○「平生不信相。不信相」汲本「平生不信邪。平生不信邪」　○「心平好去」汲本「心正可去」　○「總」汲本「總然」　○「後生家」汲本「【前腔】你後生家」　○「過頭語」汲本「過頭話」　○「神鬼事」汲本「神鬼」　○「差」汲本「乖」　○「有一箇李保逢金天」汲本「季寶遇著金神」　○「眞無假」汲本「無虛詐」　○「我哥哥使計策。使計策」汲本「我哥哥使計策。我哥哥使計策」　○「怕身死在瓜園下。身死在瓜園下」汲本「怕你死在黃泉下」　○【一江風】汲本【臨江仙】他那裏有邪魔。俺這裏偏不怕。生下 旦」　○「生折散」汲本「成拆散」　○「孤單」汲本「身單」

註 ○生長(我)在三光下―「我」は衍字であると考えて校訂した。「三光」は、日・月・星を指していう。　○平生不信(相)〔邪〕〔平生〕不信(相)〔邪〕―「相」字は、汲本に從って「邪」に校訂した。二度目の「〔平生〕不信(相)〔邪〕」は、原文では三字のおどり字で表されるが、【一江風】の句格に從って「平生」二字を補った。この常語については、『八義記』第四一出に「踏盡天涯路、平生不信邪。爲人豈怕鬼、怕鬼是心疑」とある。　○【前腔】―汲本および句格に從い、後行の曲牌名をここに前置するかたちで補った。また、句格からすれば、「你不記的(樵)〔梅〕嶺(有)〔陳〕辛」の句は白、原本では六字のおどり字で表記される末句「身死在瓜園下」は衍とすべきであるので、校訂した。　○五行―「命運」の意。(宋元)參照。　○三(柳)〔綹〕梳頭兩接穿衣女流之輩―「三綹梳頭」は女性の髮型をいうのであろうが、具體的にどのようなものを指すのかは不明。「兩接(兩截・兩節)穿衣」は、上着と下穿きが分かれた衣服か。『抱粧盒』第二折に「誰想寇承御是箇三綹梳頭兩截穿衣女流之輩、倒有這片忠心」とあり、『殺狗記』第七出には「婦人家、三綹梳頭、兩接穿衣。只曉得門內三尺土、那曉得門外三尺土」とある。その髮型・服裝から女性を指していう常語。　○(是)〔試〕說我聽―江本は「是」を「且」に校訂する。「試說我聽」は、戲曲の慣用表現。　○(樵)〔梅〕嶺(有)〔陳〕辛―江本・兪本の校訂に從う。陳辛が梅嶺で猿のもののけに妻をさらわれた話には、『清平山堂話本』「陳巡檢梅嶺失妻記」があるほか、『永樂大典』卷一三九八一「戲」「戲文」(一七)(佚。存目)に見える『陳巡檢妻遇白猿精』、『南詞敍錄』「宋元舊篇」所載『陳巡檢梅嶺失妻』などの戲曲があったことが知られる。錢南揚『宋元戲文輯佚』(上海古典文學出版社、一九五六)參照。　○運遭愚魯―未詳。「運遭」という語があるか否かを詳らかにしないが、少なくとも運命を「愚魯」とは形容しないだろう。この四字に誤りを含むか、あるいは數文字の脫落があるかもしれない。　○李(保)〔寶〕逢金天―待考。『永樂大典』卷一三九七二「戲」「戲文」(八)(佚。存目)に『金鼠鐵貓李寶』の劇目が見え、『寒山堂新定九宮十三攝南曲譜』卷首「譜選

古今傳奇散曲集總目」には、大都の人、鄭聚德の『金銀貓李寶閑花記』が著錄される。また、增譜卷四「正宮過曲」に引かれる【黃鐘賺】「集六十二家戲文名」散套に「陳留李寶、銀貓智伏金天神」とあるのも、これに關連するものであろう。錢南揚『宋元戲文輯佚』參照。なお「金天神」は、唐玄宗が華岳の神を祀って「金天王」としたものであろう。　○哥哥使計策〔哥哥〕使計策―二度目の「〔哥哥〕使計策」は、原文では三字のおどり字。句格より「哥哥」二字を補った。韻字「策」（この場合は非入聲音）は、『韻學驪珠』では拍陌韻（支時・灰回・皆來韻と叶韻）に屬するが、ここでは屑轍韻（車蛇韻と叶韻）だと考えられる。

○【（一江風）〔臨江仙〕】……〔百〕―【一江風】では、句格が合わない。汲本では、成化本の生のセリフ「何妖怪何妖怪」に相當する句より出末までを【臨江仙】とするが、句數が合わず、脚韻も家麻・干寒・庚亭韻が通押する。ここでは、前半三句の句格が【臨江仙】の後半三句に合致することから（欽譜卷八「南呂宮引子」に見える【女臨江】の【臨江仙尾】）、末尾二句を生の退場詩と考えて校訂した。なお、『張協狀元』第二〇出に見える【臨江仙】も、ここと同じ句數・句格である。第七出第二曲【臨江仙】の註參照。

○別時容易見時難―成語。このままの表現としては、李煜【浪淘沙令（簾外雨潺潺）】詞に見えるのが早く、『緋衣夢』第一折【青哥兒】、『楚昭公』第一折【賺煞】などにも見える。　○一夜枕邊都是淚―常語。『張協狀元』第二〇出の退場詩に「今夜枕頭都是淚」とある。

譯

生のうた

1【一江風】女ってやつは。人を驚かすようなことをいう。神とか魔物とかわたしはこわくなんてないぞ。このわたしは、生まれながらに天地の靈威を授かり、日月星三光の下に育まれたんだ。幽鬼なんて信じたことがない。幽鬼なんて信じたことがない。心穩やかであれば行けるってもんだ。魔物がいたってこわくはないぞ。旦のうた

2【前腔】若造ってもんは。そんな大それたことをいって。神や魔物をこわがらない人がいるもんですか。あんたの運命のめぐりあわせが惡いのが心配ってものよ。

旦のセリフ　おまえさん、何人かの古人をあんたになぞらえましょう。生のセリフ　奥さんや、女ってやつが、三つに髪を結い、上と下とに服を着ているおんなだてらに、どんな今人古人を知っているというんだ。ちょっといってごらん、きいてあげるから。旦のセリフ　あんた梅嶺の陳辛のことをおぼえてますか。生のセリフ　誰のことをいっているのかと思えば、なるほど陳巡檢が梅嶺で妻を失くしたことであったか。彼は運のめぐりあわせでばかげた出來事に出くわしたが、この劉知遠は德ある人物、彼をどうしてわたし

にたとえられよう。旦のセリフ なぞらえるべき古人がもう一人います。旦のうた

もうひとりの李寶は金天に逢いました、このことはほんとにうそ偽りではありません。兄さんが計略をつかって。兄さんが計略をつかって。あたしはあの人がほんとに憎らしい。あんたが瓜畑で死にやしないかと。

生のセリフ 奥さんや、手を放しておくれ、わたしは行く。旦のセリフ 死んでもあんたを行かせない。生のセリフ ほんとに放さないな。押し倒すしぐさ 生のセリフ なにが化け物だなにが化け物だ、いたとしたってこわくはないぞ。生退場 旦のうた

3【臨江仙】別れるは易くまみえるは難し。夫婦はむざむざひき裂かれ。ひとりぼっちのわたしがのこる。

旦のセリフ ひと晩涙にそぼった枕。明日の朝にははっきりわかる。退場

第九出 〔生、旦、淨(同前)、丑(同前)、外(同前)〕

生上唱

1【川(發)〔撥〕棹】可惜英雄都棄了。無煩惱要尋煩惱。今朝來到瓜園、明朝便見分曉。

生白 不覺的來到瓜園田地。紅輪西墜玉兎東生。我三姐說、瓜園中有鬼。常言人道、寧信其有、(墓)〔莫〕信其無。遠遠望見瓜藤樹、下是我岳丈岳母墳所。不免上前拜(巳)〔幾〕拜、將冷熱酒情由訴說一遍。

韻 蕭豪韻。

校記 汲本。 ○【川發棹】汲本【虞美人】 ○「棄了」汲本「喪棄」 ○「今朝來到瓜園」汲本「遙望臥牛岡上」 ○「明朝便見」汲本「今晩便知」

註 ○【川(發)〔撥〕棹】―汲本の作る【虞美人】とともに、南曲及び曲譜類に合致する格律がない。ここでは始譜「仙呂入雙調過曲」に引かれる【川撥棹】(第一格)の後半四句に格律が合うことから、姑く【川撥棹】のままとした。 ○無煩惱要尋煩惱―成化本『白兎記』の後段、第三七葉b・第四三葉aや、『三元記』第一九出に見える「煩惱不尋人、人自尋煩惱」という成語をふまえているのであろう。 ○田地―前稿第三出註參照。 ○紅輪西墜玉兎東生―常語。宋・祝穆『古今事文類聚』後集卷二一「肖貌部」「古今文集・古詩」に引かれる、陳摶が後周世祖に應えた歌に「玉兎東生、紅輪西墜」とあり、『武王伐紂平話』卷中に「天昏日晚、紅輪西墜、玉兎東生」とある。江本・兪本はともに「生」を「昇」に校訂するが、たとえば『三奪槊』第四折【呆古朵】に「你今日合交替他生天」とあるように、「生」はしばしば「昇」

と通じて用いられる。　○常言人道―江本・兪本ともに「人」を衍字とするが、『殺狗記』第七出【桂枝花】第五曲に「常言人道。熱心閑管招非、冷眼無些煩惱」とあり、同第一七出【梁州序】第二曲にも「自古常言人道。逆耳忠言、苦口良藥妙」とあることから、原文に従った。　○寧信其有(曇)(莫)信其無―成語。『盆兒鬼』楔子や『荆釵記』第二六出には「寧可信其有、不可信其無」というかたちで見える。　○瓜藤樹―未詳。汲本の相當箇所は「高藤樹」に作るが、汲本には他に「瓜藤樹木」という表現も見える。この出の後段に「綾錦樹」(桑樹の謂。後註參照)とあるのがこれと同一の樹だとすれば、「瓜藤樹」「高藤樹」ともに、瓜のつるの巻きついた樹、の意かもしれない。あるいは「瓜藤」で斷句すべきか。

譯

生が登場してうたう

1【川撥棹】口惜しくも英雄は棄てさられ。面倒がなくばそれを探し求めていこう。今日瓜畑にやってきた、明日になればすべてあきらか。

生のセリフ　知らぬまに瓜畑まできてしまった。陽は落ち月は昇る。うちの三女は瓜畑には魔物が出るという。諺にも「無いと信じるよりも、有ると思っておいた方がよい」ということだし。遠くに瓜のつるが巻きついた樹が見える。あの下はお義父さんお義母さんの墓だ。行ってお參りして、冷や酒やら熱燗やらを飲まされたいきさつをひととおり話しましょう。

生唱

2【鎖南枝】〔□〕靈魂、聽拜啓。今宵中着他巧計。舅舅令我看瓜、要害咱身體。望祖宗、魂保(此)〔比〕。有凶時。化爲吉。瓜精叫〔坐〕〔生〕唱

3【(鎖南枝)〔前腔〕】何妖怪、甚般樣鬼。敢和我賭鬬一箇英雄勢。我將這兩眼(模胡)〔摩挲〕、認他來踪跡。黑黑的。一箇鬼。你不下來、待何時。

生白　待我跨墻而坐、看這業畜從何而來。瓜精上白　你是村中蠻(汗)〔漢〕。來我瓜園中、有何事幹。頭上頭巾腌臜、鬢邊兩邊鬖亂。我兩手撕做你兩半、我生喫你一半、熟喫你一半。生白　業畜、見你口、不曾見你手。三合跌的我、萬事皆休。三合跌不得我、我怎肯干罷。生鬬瓜精敗　趕入地裂之中去了。我將這(獲)〔護〕身龍棒(窑)〔穴〕開地裂、石板(下)〔下〕有一匣。打開石匣看、內有頭盔衣甲、又存三卷天書。我如今把盔甲(强)埋在裏頭。又有一把大刀、刀上有兩行(李)〔字〕、(將)〔待〕我讀一遍看、道「此寶刀、賜與劉(皐)〔暠〕。五百年後、大逞英豪」。若是我劉知遠、前程有分。把刀一發埋在裏面。地草都長完了、就將綾錦樹爲(把)〔記〕。埋罷(以)〔已〕

了、不免拜謝上蒼。生唱

4【(鎖南枝)〔前腔〕】當得謝了、皇天后土。瓜園中有刀甲頭盔。且埋藏、在這裏。待前程有分、卻來取你。

旦 埋罷(以)〔已〕了、天色漸(漸)〔明〕。遠遠望見箇婦人、身穿着素(隔)〔縞〕衣服、手中提着箇飯罐兒、口口聲聲哭着願詞。好相我(郡)〔那〕三姐來了。不免躲在一壁廂、將我頭巾衣衫脫在此處、將(凌)〔綾〕錦樹(班拆)〔攀折〕(已)〔幾〕枝、就將瓜(墮)〔踩〕破(已)〔幾〕箇。看他說些甚麼。正是要知心腹事、但看他口中語。

韻 機微(吉·跡·的)、支時、灰回、姑模韻。

校記 汲本。○「拜啓」汲本「咨啓」　○「今宵中着他巧計」汲本「今晚中他計」　○「令我」汲本「着我」　○「咱身體」汲本「吾身己」　○「魂保此」汲本「蔭保庇」　○【鎖南枝】汲本【前腔】　○「甚般樣鬼」汲本「甚麽鬼」　○「敢和我賭鬬一箇」汲本「和咱比箇」　○「將這兩眼模胡」汲本「把兩眼挲挲」　○「認」汲本「看」　○「黑黑的」汲本「黑魆魆」　○「你不下來」汲本「不下來」　○【鎖南枝】汲本【剔銀燈】　○「當得謝了」汲本「當答謝」　○「皇天后土」汲本「瓜園中土地」　○「瓜園中」汲本「勞看守」　○「有」汲本、無　○「且埋藏、在這裏」汲本「兵書寶劍埋藏此」　○「待前程有分、卻來取你」汲本「得前程方來取你。神明、聽吾訴與。休洩漏天公事機」

注 ○【鎖南枝】―格律上、一句目は本來三字句になるべきであり、冒頭に「願」等の一字が脫落していると思われる。また、三句目は七字句であるべきものが七乙になっている。　○(此)〔比〕―「比」は「庇」。　○(模胡)〔摩挲〕―文脈により改めた。○來踪跡―「來踪跡」は「來踪去跡」と同じで、「來歷」の意。『劉知遠諸宮調』第三【仙呂調】【繡帶兒】に「你把行蹤去跡、細說眞實」とある。　○業畜―罵語。(宋元)(漢)參照。　○你是村中蠻(汗)〔漢〕……熟喫你一半―「漢」「幹」「贓」「亂」「半」で押韻する韻文。　○三合跌的我萬事皆休三合跌不得我我怎肯干罷―「三合敵得我、……。三合敵不得我、……」は一種の常套表現であり、『西遊記』等に頻見される。「三合」の「三」にはあまり意味がない。また、「跌」は「迭」とも表記し、「敵」に通じる。『雍熙樂府』卷九【一枝花】「下大棋賭馬」第六曲【感皇恩】に「止不鷄鳴狗盜。怎迭得虎略龍韜」とある。なお、「怎肯干罷」の「干」は、無駄に、「罷」は、やめる、の意。全體で、ただではすまさない、の意。　○石板(下)―文意に從い、「下」字を補った。　○三卷天書―常語。元曲『陳摶高臥』『岳陽樓』『博望燒屯』や『水滸傳』等にも「三卷天書」の語が見える。○(强)埋―「强」は衍字であろう。　○此寶刀賜與劉(皐)〔鬲〕五百年後大逞英豪―「刀」「鬲」「豪」で押韻する韻文。汲本は「此把寶刀、付與劉鬲。五百年後、方顯英豪」に作り、これは

四言の銘文だと考えられるので、「此」の後に「把」を補うべきであろう。　○一發―「一時」「一同」と同意。（宋元）參照。　○就將綾錦樹爲(把)〔記〕―『蔡順奉母』第三折に「桑樹神上云　園內開花我最奇、封爲綾錦樹神祇」とあり、元・王逢『梧溪集』巻四「題錢慶餘綾錦墩」詩に「華亭の東に蟠龍の塘有り、塘上　姓錢なる　人　桑を種う」「土高く過客相指して語る、千綾萬錦　城府に登らんと」とあることから、「綾錦樹」とは桑の樹の美稱であろう。また、文脈により、「把」を「記」に改めた。

○4【(鎖南枝)〔前腔〕】―汲本は【剔銀燈】とし、曲文がやや異なる上に、末尾に「神明、聽吾訴與。休洩漏天公事機」の三句を附す。また、始譜「中呂宮過曲」は【剔燈花】の按語中に、「元傳奇劉知遠・第十三折【剔銀燈】」の第一・二句として、「當答謝瓜園中土地。勞守著寶劍兵書」を引く。本曲は、【鎖南枝】の格律からいえば二句足りないが、【剔銀燈】の格律とも合わないので、いま假に【鎖南枝】の名に從う。　○當得―「應該」の意。（漢）參照。　○天色漸(漸)〔明〕―二字目の「漸」は原文おどり字。文意により「明」に改めた。「天色漸明」は常套表現。　○素(隔)〔縞〕―「素縞」は、普通は喪服。劉知遠が死んだと思って、李三娘が喪服で登場するのだろう。　○飯礶兒―普通は乞食の持ち物である。　○願詞―江本・兪本は「願」を「怨」に校訂する。「願詞」は「願文」の謂だろう。　○一壁廂―「一邊」の意。（宋元）參照。　○要知心腹事但看他口中語―成語。『通俗編』巻一五「性情」は、古樂府として「心裏の事を知るを要すれば、看取せよ腹中の書を」を引き、「按ずるに、今諺に『要知心裏事、但聽他口中言』と云うは、卽ち此れに因りて改竄するに似たり」という。また、『殺狗記』第七出【清歌兒】には「常言道要知心事、但聽他口中言語」とある。

譯

生のうた

2【鎖南枝】霊魂よ、私が申し上げるのをおききください。今宵やつらの姦計にはめられたのです。義兄さんは私を瓜畑の見張りに行かせ、私を殺そうとしています。代々の先祖さま、どうか私をお守りください。災いがあれば。吉としてください。瓜の化け物が叫ぶ　生のうた

3【鎖南枝】どこの妖怪だ、どんな化け物だ。わたしと英雄ぶりを爭おうなんてだいそれたことやるやつは。この兩目をこすって、そいつの正體をつきとめてやる。眞っ黑な、幽鬼め。お前をいま降參させなければ、いつ降參させるというのだ。

生のセリフ　塀を乘り越えて座り、この畜生がどこからやってくるか見てやろう。瓜の化け物が登場してセリフを言う　なんだ村の田吾作か。うちの瓜畑に來て、なにをするつもりだ。頭上の頭巾は薄汚れ、兩の鬢は荒れ放題。俺の兩手でお前を眞っぷたつに引き裂いて、

半分は生のままで食べ、半分は煮てから食べてやる。

生のセリフ この畜生め、お前の口上はわかったが、腕前はどうなんだ。私と戦って渡りあえれば見逃してやるが、負ければただじゃすまんぞ。

生が瓜の化け物と闘って負かす 地の裂け目に逃げこんでいきやがった。この護身用の龍棒で地の裂け目を掘ってみると、石板の下に箱があるぞ。箱を開けて見ると、中には兜と鎧、更には天書三巻が入っている。今は兜と鎧は箱の中に埋めておこう。他に一振りの大刀があり、刀の上には文字が二行並んでいるから讀んでみよう。「この寶刀は、劉曷に授與される。五百年後に、その英雄ぶりを發揮するであろう」とある。劉知遠のことだとすれば、私の前途には見込みがある。刀も一緒に箱の中に埋めておこう。地面の草がみな生長してしまったら、桑の樹が劍の目印となるだろう。埋め終わったなら、天にお禮を申し上げよう。

生のうた

4【前腔】お禮をしなければならない、天の神と地の神に。瓜畑には刀と鎧兜が埋められていた。それらをしばらく埋めておこう、この場所に。私の前途が開けたら、再びお前たちを取りに來よう。

生のセリフ 埋め終わった、空が次第に明るくなってきたぞ。遠くに一人の女が見えるが、身に白裝束をまとい、手には物乞いの飯罐を提げ、泣き叫んで口はしきりにムニャムニャいっている。どうやらうちの三女がやってきたようだ。わきに隠れ、頭巾と衣服をここに脱ぎ捨て、桑の樹の枝を何本か折り、瓜を幾つか踏み割っておくとしよう。さあ、あいつはなんていうだろう。まさに「腹の中を知りたければ、口の中の言葉を聽け」というやつだな。

5【(步步嬌)〔醉扶歸〕】旦上唱 苦惱子〔軋〕〔乾〕生受。只得到此且懷羞。奴與我的哥哥有甚冤仇。只得荒忙便走。裙兒忙把飯來(二)〔兜〕。淚濕了奴衣衫袖。淚濕了奴衣衫袖。

旦白 這(二)〔裏〕來到瓜園門首、瓜園門半掩半開。我待進去、只怕瓜精食(敢)〔噉〕性命、待不進去、我那丈夫在里面忍餓。不知性命有無、不免叫他(已)〔幾〕聲。丈夫、丈夫。天哦、連叫數聲不應、想必丈夫被瓜精喫了。這不是我丈夫衣衫頭巾。樹也(二)〔攀〕折了、(棠)〔蹚〕土蕩的有三四寸深。丈夫、交你休來、你苦苦要來。罷罷、我將這碗(良)〔涼〕(將)〔漿〕水飯祭賽了你、我回家(闌)〔閨〕中尋箇自盡。趕到鬼門關上、還做夫妻。

一嫁劉郎得半春。爲人莫作婦人身。夫妻本是同林鳥、

兄嫂如同陌路人。身孕未知男共女、枕邊難捨(意)〔義〕(河)〔和〕恩。眼中滴盡千行淚、只得撮土焚香事有因。

旦唱

6【(步步嬌)〔前腔〕】怕兄嫂怕兄嫂成潺僽。只得到此少香酒。你夜來做事不依奴口。你先在瓜園埋屍首。夫妻們恩愛逐與水東流。淚濕了衣衫袖。淚濕了衣衫袖。

7【(步步嬌)〔前腔〕】(止)〔指〕望(止)〔指〕望頭白相守。誰想和你不長久。百歲夫妻今日一旦休。半年身孕伊知否。正是誰人知道知道我心頭。淚濕了我奴衣衫袖。淚濕了我奴衣衫袖。

旦白 有(財)〔才〕無壽少年亡。鸞鳳分飛實可傷。如今不敢高聲哭、只恐人聞也斷腸。虛下 生上白 三姐那去。

旦白 有鬼哦。生白 娘子、行步有影、衣衫有縫、焉能是鬼。旦白 你(計)〔既〕不是鬼、一聲高似一聲、你是鬼、一聲低似一聲。生白、大叫 三姐、三姐。旦白 休說不是鬼、就是我的丈夫、不免上前見他一見。抱頭相哭

旦白 丈夫、你(生)〔在〕那里來。生白 我在高墻里面盹睡。旦白 丈夫、我叫你休來、你苦苦要來。生白 娘子、早信你的言語(道)〔倒〕好來。一更無事、二更悄然、三更時分、果見一金眼瓜精。口似血盆、牙似(剛)〔鋼〕劍、兩眼放萬道火光。鬬我三十餘合、跌我不過(蚌)〔蹦〕入地裂之中去了。旦白 丈夫、早是你手段高强、若不你手段高强、卻不死在瓜精之手。生白 娘(了)〔子〕、我遠遠的望見你手中提着些甚麼東西。(生)〔旦〕白 丈夫、我瞞着哥哥嫂嫂、偸的半(灌)〔罐〕兒飯、與你充饑。

生白 娘子、正中下懷。旦白 丈夫、請喫飯。生白 娘子、飯便有了、卻怎生沒一(恨)〔根〕(萊)〔菜〕。三姐、我好恨。旦白 莫不恨我奴家看的你遲了。生白 我男子漢自恨無能、豈肯恨你婦人。旦白 不恨我恨誰。生唱

8【(步步嬌)〔前腔〕】自恨我不唧嚕。這碗淡飯交我怎入口。

旦唱 你且胡亂充饑你莫要愁。

旦白 丈夫、你身上衣衫因何破碎了。生唱

身上衣破因爲與瓜精鬬。悶似長江水懨懨不斷流。淚濕了我奴衣衫袖。淚濕了我奴衣衫袖。

旦白 丈夫、你自從到這里、可曾參拜我爹爹母親不曾。

生白 我劉知遠一到就與參拜了。旦白 我如今(在)〔再〕和你同去拜謝爹爹母親。旦唱

9【(步步嬌)〔前腔〕】謝我爹娘保佑。今朝和你再厮守。必定你前程顯達、不遇瓜精鬬。悶似長江水淹淹不斷流。淚濕我奴衣衫袖。淚濕我奴衣衫袖。

韻 鳩侯韻。「達」は失韻。

校記 5・6—汲本、始譜。○【步步嬌】諸本【醉扶歸】 ○「苦惱子」汲本「好苦切」、始譜「奴苦惱」 ○「軋生受」諸本「甘

生受」　○「懷羞」汲本「藏羞」、始譜「含羞」　○「我的哥哥」諸本「哥哥」　○「荒忙」汲本「慌忙」　○「便走」始譜「奔走」　○「裙兒」汲本「裙兒破」　○「二」諸本「兜」　○「淚濕了奴衣衫袖。淚濕了奴衣衫袖」汲本「㊀淚濕透衣衫袖」、始譜㊀淚濕透奴衣衫袖」　○【步步嬌】汲本【前腔】、始譜【醉扶歸】　○「怕兄嫂怕兄嫂」諸本「怕兄嫂」○「潺懋」諸本「僝懋」　○「只得」諸本「慌忙」　○「少香酒」汲本「少了香和酒。又沒資財與奴收受」、始譜「少了香和酒。又沒資財與奴收留」　○「不依」始譜「怎不依」　○「你先在瓜園埋屍首。夫妻們恩愛、逐與水東流。淚濕了衣衫袖。淚濕了衣衫袖」諸本「誰人知道我心憂。㊀前」

7―汲本。　○【步步嬌】汲本【前腔】　○「止望止望」汲本「指望和你」　○「想和你」汲本「知今日」　○「今日一旦休」汲本「一旦休」　○「正是誰人知道知道我心頭。淚濕了我奴衣衫袖。淚濕了我奴衣衫袖」汲本「或男或女要當留。㊀前」

8―汲本、始譜。　○【步步嬌】汲本【醉扶歸】、始譜【醉歸月下】○「不唧嘟」諸本「好不唧嘟」　○「交我怎入口」汲本「怎入口」、始譜「教我怎入口」　○「你且胡亂」諸本「胡亂」○「你莫要愁」汲本「莫要愁」、始譜「莫害羞」　○「身上」諸本「胸前」　○「因爲與瓜精鬬」汲本「爲與瓜精鬬」、始譜「與那瓜精鬬」　○「悶似長江水」汲本「㊀悶似湘江水」、始譜「悶似湘江水」　○「懨懨」諸本「涓涓」　○「淚濕了我奴衣衫袖。淚濕了我奴衣衫袖」汲本「濕透衣衫袖」、始譜「淚濕透奴衣衫袖」

9―汲本。　○【步步嬌】汲本【前腔】　○「保佑」汲本「陰佑」○「今朝和你」汲本「夫妻今日」　○「必定」汲本「畢竟是」○「不遇瓜精鬬。悶似長江水淹淹不斷流。淚濕我奴衣衫袖。淚濕我奴衣衫袖」汲本「夜來不落瓜精手。㊀前」

註　○【(步步嬌)〔醉扶歸〕】―第五曲から第九曲までの曲牌名を、諸本はすべて【醉扶歸】に作り、末尾二句を疊せずに一句のみを合唱とする。【步步嬌】【醉扶歸】いずれも、曲譜類にここでの格律に合致するものが見あたらないが、諸本に從って、いま假に【醉扶歸】に改める。なお第八曲について、始譜「仙呂宮過曲」は、【醉扶歸】と【桂枝香】の合曲【醉歸月下】とする。校記參照。また、第五・六曲の第一句は六乙と考えざるを得ないが、第七曲の第一句は六字句である。　○苦惱子―「惱」は、原來は「腦」であり、「苦腦子」で「好苦」の意。『幽閨記』第二五出に「苦腦子。苦腦子」とある。　○這(二)〔裏〕來到―「二」は、「ㄦ」と「亠」と「里」とが組み合わさった形で「裡」の字形に似る。○食(敢)〔噉〕―「敢」を、江本・兪本はともに「我」に校訂するが、汲本の對應する一段に「食啖性命」とあるのを參照して改めた。　○(棠)〔蹚〕土蕩的有三四寸深―この出の後段にも、「(堂)〔蹚〕土躚到四五寸深」とある。「蹚土」は、地面を踏み荒らす、の意。ここの「蕩」も「躚」に校訂すべきかもしれない。

○(良)(涼)(將)(漿)水飯―さめたお粥。元本『琵琶記』第二八出に「展開與他燒些香紙、奠些涼漿水飯、也是奴家心素」、『兒女團圓』第四折に「到那冬年節下、月一十五、瀝不了的涼漿冷飯、去我那絕戶的骨頭上澆奠一兩盞、便是報答老糟頭一般」とある。　○趕到鬼門關上還做夫妻―『清平山堂話本』「快嘴李翠蓮記」の李翠蓮が離縁状を書かされるシーンにも「恩愛絶、情意斷、多寫幾箇弘誓願。鬼門關上若相逢、別轉了臉兒不厮見」とあることから、引き裂かれた夫婦が「鬼門關」で再會するというのは常套的イメージなのであろう。　○一嫁劉郎得半春……只得撮土焚香事有因―眞文韻で押韻する七言の韻文。この一段は、原文では一句ごとに若干の空格を挾んで分かち書きされており、「身孕未知男共女」句の直後には、小圈點が插入される(ただしこの圈點には意味が見出しがたく、おそらく何らかの誤り)。これら版本上の表記には、眞文韻が用いられていることと相俟って、說唱詞話との關聯が想定されよう。末句にいう「事有因」は、「有因」「事因」「言因」などと同じく、押韻のための便宜的表現。　○爲人莫作婦人身―成語。唐・白居易『白氏長慶集』卷三「新樂府・太行路」詩に「人として生まれなば婦人の身と作る莫かれ、百年の苦樂 他人に由る」とあるのにもとづき、戲曲にもしばしば見られる。　○夫妻本是同林鳥―成語。普通は「大限來時各自飛」或いは「大限到來各分別」を後援するかたちで用いられる。夫婦は因緣に從って離合するものだ、という意。この成語は、百卷本『法苑珠林』卷五二「眷屬篇第五六之餘」「離著部」所引『五無反復經』に「父子二人 田を耕すに、毒蛇 其の子を螫殺す。……復た其の婦に語げて『卿の夫已に死するに何ぞ啼哭せざる』と。婦 說喻して梵志に向かいて言わく『譬如うるに、飛鳥は暮れに高樹に宿り、同に止まり共に宿るも、明くるを伺(ま)ちて早く起くれば、各自飛び去り、行きて飲食を求む。緣有らば卽ち合し、緣無ければ卽ち離る。我等夫婦も亦た復た是の如し』と」とあるのにもとづく。

○兄嫂如同陌路人―『張協狀元』第三八出、退場詩に「自家骨肉尙如此、何況區區陌路人」とあり、『殺狗勸夫』第一折【賺煞】に「可怎生把親兄弟如同陌路人」とあるように、血緣親者と「陌路人」を比較するのは、常套表現。　○(意)(義)(河)(和)恩―江本・兪本がすでに同樣に校訂する。　○撮土焚香―前稿第三出註參照。　○潺僽―普通は「僝僽」に作る。さいなむ・苦しめる、の意。宋・黃庭堅【宴桃源】「書趙伯充家小姬領巾」詞に「天気把人僝僽、落絮遊絲時候」とあり、『西廂記諸宮調』卷四【仙呂調】【點絳脣】に「可憎姐姐、休把人僝僽」とある。　○水東流―常語。逝き去って二度と歸らぬことをたとえていう。たとえば、李白『李太白文集』卷一三「夢遊天姥吟留別」詩に「世間の行樂 亦た此の如し、古來萬事東流の水。君と別れ去らば何れの時にか還らん」とある。　○頭白相守―常語。宋・史達祖【于飛樂】「鴛鴦怨曲」詞に「頭白相守、情雖定、事卻難期」

とあり、『調風月』第四折【殿前歡】に「頭白相守、(服)(眼)黑處全無」とある。　○我奴―用例を見ないが、誤りではあるまい。後文には「我奴家」の語も見られる。　○有(財)(才)無壽少年亡……只恐人聞也斷腸―旦の退場詩の役割をする七言四句の韻文。「有才無壽」は常語。『范張鷄黍』第四折、正末の登場詩に「元伯蕭然一命亡、有才無壽兩堪傷」とある。また、「如今不敢高聲哭、只恐人聞也斷腸」は成語。『小孫屠』第一四出、末の退場詩に「見時不敢高聲哭、恐怕人聞也斷腸」、元本『琵琶記』第二〇出、退場詩に「歸家不敢高聲哭、只恐人聞也斷腸」とある。この成語の冒頭二字が、劇の筋に從って變化する例については、錢南揚『永樂大典戲文三種校註』「小孫屠」第一四出、校註(二九)を參照。　○行步有影衣衫有縫―幽鬼でないことをいう常套表現。『桃花女』第二折に「我行有影、衣有縫、怎麼是鬼」、『紅梨花』第四折【梅花酒】に「怎道我鬼魅相纏。今日箇有口難言。我衣有縫身有影、敢是你無情我無緣」とある。

○你(計)(既)不是鬼一聲高似一聲你是鬼一聲低似一聲―人と幽鬼を判別する際の常套表現。脈望館本『合汗衫』第四折に「你若是人呵、我叫你三聲、你一聲似高一聲。你若是鬼呵、我叫你三聲、你一聲低似一聲」とある。　○口似血盆牙似(剛)(鋼)劍兩眼放萬道火光―敦煌文書スタイン二六一四「大目乾冥間救母變文」に、地獄の鬼卒の形相を描寫して「牙は劍樹の如く、口は血盆の如く、聲は雷鳴の如く、眼は掣電の如し」という。

○早是―「幸是」「幸虧」の意。(匯)參照。　○唧溜―「唧溜」「卽留」などとも表記する。「機靈」「聰明」の意。唐・盧仝『玉川子詩集』卷二「揚州送伯齡過江」詩に「唧溜ならざる鈍漢、何に由りてか姓名を通さん」とある。清・胡文英『吳下方言考』卷一〇參照。なお、『元曲釋詞』「卽留」(一)の條は、宋・洪邁『容齋三筆』卷一六「切脚語」の條に「精は卽零たり、螳は突郎たり」とあるのを引いて、「卽零は、卽ち鯽令。亦た卽溜字の音轉なり」という。　○悶似長江水懨懨不斷流―成語。『張協狀元』第五○出に「我悶似長江水、涓涓不斷流」とある。上句の「長江水」には、『劉弘嫁婢』第二折、外の登場詩の「湘江水」、『黃花峪』第三折の「三江水」等のヴァリエーションがある。また、下句の「懨懨」は、上掲『張協狀元』の例のごとく普通は「涓涓」に作る。第九曲ではこれを「淹淹」に作るが、『金錢記』第三折【鬬鵪鶉】に「似長江淹淹的不斷流」とあるように、これも誤りではない。　○必定你前程顯達不遇瓜精鬬―一套内の同曲の格律と比較すると「達」は失韻。「不遇瓜精鬬」は意味がよくわからない。汲本は「夜來不落瓜精手」に作り、意味が通じやすい。

譯

5【醉扶歸】旦が登場してうたう　ああつらい、あだに苦しみを受け。やむなくここまで來たもののもじもじするばかり。兄さんとは何の怨恨がありましょう。取るものもとりあ

えず。スカートで急いでご飯を包んで走ってくるしかない。涙に私の着物の袖も濡れ。涙に着物の袖も濡れそぼち。

旦のセリフ 瓜畑の入り口までやって來ると、扉が半開きになっています。中に入ろうとすれば、瓜の化け物に食われるのが怖い、入らないでおこうとすれば、私の夫が中で饑えを忍んでいます。果たして無事か否か、ちょっと呼びかけてみましょう。おまえさん、おまえさん。おや、何回呼んでもこたえがない、きっと瓜の化け物に食べられたんだわ。これは彼の服と頭巾ではありませんか。木の枝もひき折られ、地面も三四寸の深さまで踏み荒らされている。おまえさん、來させまいとしたものを、あなたは意地でも來ようとした。仕方ない、この冷めたお粥であなたをお祀りしましょう。わたしは家に戻って自害をするわ。三途の川まであなたを追い驅け、ふたたび夫婦になりましょう。

劉郎に嫁いで半年。人と生まれて妻にはなるものでない。夫婦はもとよりひとつの林にかりそめに棲む鳥(時が來れば別々に飛ぶ、とはいうものの)、兄夫婦ともまるであかの他人。身ごもっているのは男か女か知らないが、夫婦の義理・恩愛は捨て難いもの。眼から落ちるは千筋の涙、土をつまんでお香としお弔いすることとなりました。旦のうた

6【前腔】兄さん義姉さんに兄さん義姉さんにいじめられるのが心配。やむなくここまで來たが線香とお酒がない。夕べあなたは私のいうことをきかず。瓜畑に屍を先に埋めることとなりました。夫婦の情は長江の流れとともに東へ向かうばかり。涙に着物の袖も濡れ。涙に着物の袖も濡れそぼち。

7【前腔】共白髪を望んだのに。あなたと永遠に連れ添うことができないと誰が思ったことでしょう。百年の夫婦も今日でいったんはおしまい。半年の身重をあのひとは知っていたかしら。まさしく「私の心を誰が知る知る誰が知る」。涙に私の着物の袖も濡れ。涙に着物の袖も濡れそぼち。

旦のセリフ 才あるも長壽に恵まれず夭逝し。鳳凰がちりぢりに飛ぶのは實に悲しむべきこと。今は聲をあげては泣けません、ひとが聞いてもはらわたがちぎれるでしょうから。旦はいったん退場 生が登場してセリフを言う 三女さんやどこへ行く。旦のセリフ 幽鬼がでた。生のセリフ 奥さん、歩けば影があり、服には縫い目があるのに、どうして幽鬼なものか。旦のセリフ あなたが幽鬼でないのなら、一聲ごとに大聲になり、あな

たがもしも幽鬼なら、一聲ごとに小聲になるはず。生のセリフ、大聲をあげる三女さん、三女さん。旦のセリフ幽鬼でないのはいうまでもない。私の夫だわ。前へ進みでて挨拶しましょう。頭を抱え泣く旦のセリフおまえさん、どこにいたの。生のセリフ塀のなかで居眠りしていたんだ。旦のセリフおまえさん、私が來るなっていったのに、どうしても來ようとしたのね。生のセリフ奥さん、最初からあなたのことばを信じていたらよかった。「一更には何事もなく、二更はしいんとしていて、三更になった頃には」というやつで、果たして金色の眼をした瓜の化け物があらわれ、口は血のタライの如く、牙は鋼の劍のよう、兩眼からは無數の火花を放つ。三十回以上も渡りあったが、私にかなわず、土の裂け目に跳び込んでしまった。旦のセリフおまえさん、あなたは腕がたつからよかったものの、そうでなければ瓜の化け物の手にかかって死んでいたでしょう。生のセリフ奥さん、手に何か提げてきたのが遠くから見えたが。旦のセリフおまえさん、兄さん義姉さんに隠れて半罐のご飯を盗んできたの、あなたの饑えを滿たしてあげようとおもって。生のセリフ奥さん、それはちょうどよかった。旦のセリフおまえさん、どうぞおあがりになって。生のセリフ奥さん、ご飯だけで、どうしておかずがひとつもないんだ。三女さん、私はずいぶん恨めしい。旦のセリフわたしを恨むのね、あなたを見つけるのが遲かったから。生のセリフ丈夫はおのれの無能を恨みこそすれ、どうして奥方を恨みに思おうか。旦のセリフ私を恨まなかったら誰を恨むの。生のうた

8【前腔】うらむはおのれの頭の鈍さ。何の面目があってこの粥を口にできよう。旦のうたとりあえずは間に合わせで饑えを滿たし嘆くのはやめて。

旦のセリフおまえさん、身につけた服はどうして破れてぼろぼろなの。生のうた

身につけた服は瓜の化け物との鬬いでやぶれたもの。うれいは長江の流れのごと滔々と絶え間なく流れ。涙に私の着物の袖も濡れ。涙に着物の袖も濡れそぼち。

旦のセリフおまえさん、ここにきてから、おとうさんおかあさんにお參りはしましたか。生のセリフわたくし劉知遠、來てすぐにお參りしました。旦のセリフいまもう一度、父母にお禮申し上げましょう。旦のうた

9【前腔】父母のご加護に感謝します。今日ふたたび寄りそうことができました。かならずやあなたの前途は洋々、瓜の化け物と鬬うことなんてありません。うれいは長江の流れのごと滔々と絶え間なく流れ。涙に私の着物の袖

も濡れ。涙に着物の袖も濡れそぼち。

淨上 老婆、我們拾骨頭兒去來。旦 劉知遠、我哥哥又來了。我夫妻二人躲避躲避。生白 娘子靠後。我與這厮一頓好打。旦白 丈夫、看我奴家面上、不要和他一般見識。你我夫妻二人回避他罷。淨白 老婆、拿褡褳來、拾骨頭去也。丑白 爛刀剁的、你去。我不去。我有鷄眼、孤拐病發了、我去不的。淨白 你不去我去。老婆、我眼跳。丑白 你眼跳、貼一箇草棒兒。淨白 閻王注定三更死、誰敢留人到六更。牧兒哄(差)〔我〕說了、湛湛青天不可欺。井里蝦蟆沒毛衣。八十娘娘站着溺、手里只是沒拿的。我來到瓜園門首、逕進去、歪歪歪、這不是光棍的衣衫頭巾。你看、(堂)〔蹚〕土躧到四五寸深、這瓜精喫的這們干淨。不免(什)〔拾〕些驢馬骨頭兒。回家哄我妹子、方肯改嫁。㕓(什)〔拾〕骨頭科 生上來打科 旦勸〔科〕 〔淨白〕你打。打了我、看你怎麼喫我飯。淨下

註 ○不要和他一般見識—第五出註參照。 ○鷄眼—病名。うおの目。醫學用語では「肉刺」。『御纂醫宗金鑑』卷七一「編輯外科心法要訣」「足部」「肉刺」の條に「肉刺の證は纏脚由り生ず、或いは窄鞋を着きて遠路を行くによる」とあり、その註に「此の證は生じること脚指に在り、形は鷄眼の如し。故に俗に鷄眼と名づく」とある。淨や丑といった道化役が女性に扮した場合、しばしば自らの足を笑いの種にする。ここもそういった「打諢」であろう。 ○孤拐—『御纂醫宗金鑑』卷八九「編輯正骨要旨」「四肢部」「足五趾骨」の條に、「趾は、足の指なり。名づくるに趾を以てするは手と別かつ所以なり。俗に足節と名づく。其の節數は手の骨節と同じ。大指本節の後內側の圓骨の努突せる者、一名核骨、又名竅骨、俗に呼びて孤拐と爲すなり」とある。 ○眼跳—瞼の筋肉が痙攣すること。古人の俗信で不吉なことが起こる前兆。 ○草棒兒—未詳。草の莖をいうか。 ○閻王注定三更死誰敢留人到六更—成語。『張協狀元』第九出、丑の退場詩に「一半金珠便放行、此山喚做萬人坑。閻王註定三更死、不許留人到四更」、『金瓶梅詞話』第六二回に「閻王教你三更死、怎敢留人到五更」とある。ここにいう「六更」は、實際の生活にあっては使用されない表現だから、「六」を「四」ないし「五」に校訂すべきかもしれない。 ○牧兒哄(差)〔我〕說了湛湛青天不可欺……手里只是沒拿的—待考。「湛湛青天不可欺」以下は、七言四句の韻文。ここでは「差」を「我」の誤りとし、「湛湛」以下四句を牧童が述べた內容と考えた。「湛湛青天不可欺」は前出の成語。「八十娘娘站着溺」は下句の「手里只是沒拿的」を導く歇後語かもしれない。四句全體で意味がどのようにつながるのかは不明。 ○歪歪歪—嘆詞。ここに用いられる「歪歪歪」がいかなるニュアンスかはわからないが、淸・

范寅『越諺』巻上「孩語孺歌之諺第一七」に「㝱は、小兒の嚆なり。越音『歪歪』。卽ち此を以て之れを呼ぶ」とあるように、「歪」音が嘆詞として用いられることはあるようである。　○躍―兪本は「踹」に校訂する。「躍」は、『西遊記』等に見えるように、踏む、の意。　○這們―第五出「唖」那裏這們雷嚮」の註參照。

譯

淨登場 女房や、骨を拾いに行きましょう。**旦のセリフ** 劉知遠、兄さんがまたやって來ました。わたしたち夫婦はかくれましょう。**生のセリフ** 奥さんは下がっておれ。あいつに一發げんこつを喰らわしてやろう。**旦のセリフ** おまえさん、私の顔を立てて、あんなひとと喧嘩はよして。わたしたち夫婦が避ければいい。**淨のセリフ** 女房や、袋を持って來な。骨を拾いに行こう。**丑のセリフ** ぼろ刀できられちまえ、あんたが行きな。あたしは行かないよ。あたしは魚の目がある。足の裏の病が痛くなっちまった。あたしは行けないよ。**淨のセリフ** おまえさんが行かないで俺が行くのか。女房や、おいらは瞼がぴくぴくする。**丑のセリフ** 瞼がぴくぴくするだって。草の莖でも貼っておきな。**淨のセリフ** 閻魔様が三更の死と決めたなら、誰が六更まで生きられよう。牧童がおいらをそそのかしやがった、「公明正大な天は欺くべからず。井の中の蛙は羽がない。八十のおっかさんが立小便すりゃあ、手の中には何も摑むものがない」ってな。瓜畑の門のところまでやって來た。まっすぐ中へ入ってみよう。やいやいやい、これはあのごろつきの衣と頭巾ではないか。ほら、土は四五寸も踏み碎かれているぞ。瓜の化け物め。こんなに綺麗に食っちまいやがった。驢馬野郎の骨でも拾っておこう。家に戻って妹をさんざんおだてて、やっと再婚してくれるというもの。**骨を拾うしぐさ** **生が登場して毆るしぐさ** **旦がいさめるしぐさ** **淨のセリフ** ぶちやがれ。俺をぶてば、今後俺の飯をどんな顔をして食うか見てやるぜ。**淨退場**

外上白 冷眼看人煩惱少、熱心閑管是非多。**旦白** 劉知遠、我叔叔來了。怎生是好。**生白** 娘子、你靠後。等我將冷熱酒情由告訴叔丈一遍。**外白** 劉知遠、你打狗看主人面。**生白** 叔丈、他不合哄我瓜園中看瓜、害我性命。**外白** 哎、天殺天剮的、(所)(那)般的害你害不得、卻將這般害你。瓜園中見些甚麼來。**生白** 一更無事、二更悄然、三更時分來、見一金眼瓜精、敵鬬三十餘合、敵我不過、(蚌)(蹦)入(他)(地)裂之中去了。**外白** 劉知遠、早是你手段高强、不是你手段高强、卻不死在瓜精手下。劉知遠、你打便打了、才方那弟子孫兒說、你打了他、怎麼去喫他的飯。**生白** 萬望叔丈(□……□)、怎生是好。**外白** 老夫(回)(耳)聞的、(賓)

〔幷〕州太原府岳節使、招集義軍三千、因爲反了山東兗州府蘇林・袁〔脚〕〔角〕兩員賊將、無人收捕。你這等武〔又〕〔義〕高强、那不好投〔死〕〔充〕身〔投〕〔役〕。若得一官半職回來、改換門閭、與你三姐爭一口気、卻不好。生白 叔丈、我心〔心〕也要如此、爭奈身〔遠〕〔邊〕缺少二文盤費。外白 劉知遠、你若肯去、老夫有十兩棺材本、與你拿去。生白 〔計〕〔既〕是這等、叔丈、謝承〔週賚〕〔周濟〕。外白 你如今與三姐孩兒拜辭了、我就行。生白 叔丈、我去則去、家中三姐無人照〔雇〕〔顧〕。

外白 這事都在老夫身上。生唱

10【桂枝香】叔丈聽告。容吾分剖。只因我缺少些盤纏、交我怎生是好。多因是我命薄。〔多因是我〕命薄。喫他〔悟〕〔誤〕了。自今朝。拜別恩人去、冤家恨怎消。旦唱

11〔【前腔】〕死我爹娘之後。止有我嫡親哥嫂。他〔元〕〔緣〕何反面無恩、〔折〕〔拆〕散了夫妻兩口。多因是我命薄。〔多因是我〕命薄。交奴怎好。自今朝。苦逼奴分離去、交奴家受苦惱。外唱

12〔【前腔】〕不須煩惱。你若是缺盤纏、交我怎生是好。你不必掛懷、你不必掛懷、只有青天高照。這事必然還報。自今朝。拜辭投軍去、堅心莫憚〔旁〕〔勞〕。

外白 我老夫回去。你兩口〔光〕〔兒〕在此作別。我隨即叫〔豆〕〔寶〕老、送盤纏與你。這事也不干我事、也不干孩兒事。這事我哥做事欠商量。災禍起〔消湘〕〔蕭牆〕。鳳凰落在梧桐樹、自有傍人話短長。下

韻 蕭豪〔告・薄〕、鳩侯韻。「懷」は失韻。

校記 汲本。 ○「分剖」汲本「分道」 ○「只因我」汲本「只因」 ○「些盤纏」汲本「盤纏」 ○「怎生」汲本「如何」 ○「多因是我命薄。命薄」汲本「多因命乖。多因命乖」 ○「悟了」汲本「胡吵。是我分緣不到」 ○11〔【前腔】〕汲本【前腔】 ○「死我爹娘之後」汲本「自從爹爹死了」 ○「我嫡親哥嫂」汲本「嫡親兄嫂」 ○「元何」汲本「緣何」 ○「無恩」汲本「生嗔」 ○「折散了」汲本「折散」 ○「多因是我命薄。命薄。交奴怎好」汲本「望叔叔做主、望叔叔做主、想是姻緣不到。怎得夫妻偕老」 ○「苦逼奴分離去、交奴家受苦惱」汲本「拜別分離去、交奴苦怎熬」 ○12〔【前腔】〕汲本【前腔】 ○「不須煩惱」汲本「聽吾言道。不須煩惱」 ○「你若是缺」汲本「你若缺少」 ○「交我怎生是好。你不必掛懷、你不必掛懷、只有青天高照。這事必然還報」汲本「頃刻令人送到。他若昧心、他若昧心、上有蒼天知道。必然還報」 ○「拜辭投軍」汲本「步輦登程」 ○「憚旁」汲本「怎熬」

註 ○冷眼看人煩惱少熱心閑管是非多―成語。外の登場詩。『幽閨記』第三二出、小旦の退場詩に「熱心閑管是非多、冷眼覷人煩惱少」、『殺狗記』第七出【桂枝香】第五曲に「常言人道、熱心閑

管招非、冷眼無些煩惱」とある。　○打狗看主人面―成語。『玉環記』第一七出、『義俠記』第二七出に「打狗看主面」と見える。犬を毆る場合でもその飼い主の顔を立てなければならない、の意。　○不合―吏牘語。ふとどきにも、といった意。　○(所)〔那〕―江本・兪本に従って校訂した。　○卻將―「將」は語助。宋・史達祖【杏花天(細風微月垂楊院)】詞に「卻將因而夢見」、宋・魏了翁【臨江仙】「杜安人生日」詞に「卻將不繫自由身」とある。○才方―「剛剛」「剛才」の意。(宋元)參照。　○萬望叔丈(□……□)怎生是好―このままでは意味が通りにくく、江本は「叔丈」の下に脱文を疑う。ここでは、「指教」といった脱文を想定して譯をつけた。　○(回)〔耳〕聞的―前掲の林昭德論文は、成化本『白兎記』の後文、第三七葉aや第三九葉b等に「耳聞」の語が見えることを指摘し、「回」を「耳」に校訂する。これに従う。兪本は「回」を「因」に校訂しており、「因」の俗字は確かに「回」字に類似するが、「因聞的」という表現はあまり熟さないように思われる。　○(賓)〔幷〕州―成化本『白兎記』の後文四箇所の「幷州」はすべて「賓州」と表記される。　○袁(脚)〔角〕―成化本『白兎記』の後文、第二八葉bに「袁角」とあるので、これに従う。　○(又)〔義〕―「又」は「義」の簡略體の字形との類似に由來する誤り。「義」は「藝」の同音による誤り。　○那不好投(死)〔充〕身(投)〔役〕―「那不好」はこのままでは意味が通りにくく、三字が衍字である可能性もある。ここでは「那不」を「卻不」「可不」と同意として譯した。「充」「役」については、江本・兪本がすでに同様に校訂する。○心(心)―原文では、二字目の「心」はおどり字。兪本・江本はともに「心思」と校訂するが、ここでは二字目を衍字と考えた。○【桂枝香】―曲律から見て、一曲目は「喫他(悟)〔誤〕了」の後に一句、二曲目は「〔多因是我〕命薄」の後に一句、三曲目は冒頭の一句が脱落していると思われる。校記參照。　○喫他―「他」には指示性はなく、「喫」を二音節化したもの。「喫他」で受身を表す。　○冤家―汲本は、この曲辭の前に「李洪一」という入れセリフを置く。「冤家」は、最も愛する人、の意になることもあるが、ここでは、仇、の意。　○多因是我命薄〔多因是我〕命薄―二度目の「〔多因是我〕命薄」は、原文では二字のおどり字で表記される。格律から四字を補った。二曲目も同じ。○兩口(光)〔兒〕―江本・兪本は「光」を「先」に校訂する。○做事欠商量……自有傍人話短長―四句は外の退場詩。「蕭牆」は『論語』「季氏篇」に見えることば。「蕭牆之憂」で、家族・身内などの内輪もめ、の意。すでに江本・兪本が同様に校訂する。「禍起蕭牆」の四字は俗文學中に散見されるが、「做事欠商量。災禍起蕭牆」でおそらくひとつの成語であろう。また、第三・四句も成語。宋・葉紹翁『四朝聞見錄』甲集「三文忠」の條が引く無名子の詩に「大家飛上梧桐樹、自有旁人說短長」とあり、『陳母教子』第二折、大末の退場詩に「鳳凰飛在梧桐樹、呸、自有

旁人話短長」とある。「鳳凰落在梧桐樹」は、特別にめでたい事が起こったことをいう。

譯

外が登場してセリフを言う 冷たい眼で傍観していれば悩むことはなく、眞心でもってお節介をやけばいさかいばかり。旦のセリフ 劉知遠、叔父さんが來ました、どうしたものでしょう。生のセリフ 奥さん、あなたは下がっていなさい。ひとつ私が冷や酒やら熱燗やらを飲まされたいきさつを一通り話してみよう。外のセリフ 劉知遠、犬を毆るときにもその飼い主の顔を立てなければならないというであろう。生のセリフ 叔父上、彼はふとどきにも私を騙して瓜畑に見張りに行かせ、私を殺そうとしました。外のセリフ なに、死に損ないの罰當たりめ、ああやってお前を殺そうとしてできなかったからといって、こうやってお前を殺そうとしたとは。いったい瓜畑の中に何が現れたのだ。生のセリフ 「一更には何事もなく、二更はしいんとしていて、三更になると」というやつで、金色の眼をした瓜の化け物があらわれ、三十回以上も渡りあいましたが、私にかなわず、土の裂け目に跳びこんでしまいました。外のセリフ 劉知遠、幸いにもお前の腕がたつからよかったものの、もし腕前がよくなければ瓜の化け物の手にかかって死んでいただろう。劉知遠、やつを毆るのはいいが、ちょうど今あのばかやろうが、もしおまえがやつを毆ったら、やつの飯をどう食うのか見てやろうといっていたぞ。生のセリフ 叔父上どうぞお教えください、どうしたらよいでしょうか。外のセリフ 私が聞いたところによると、幷州太原府の岳節度使が三千の義軍を集めているのは、山東の兗州府の蘇林・袁角二人の賊將が叛いたが捕らえられる者がいないため、とか。お前はこのように武藝の腕がたつのだから、軍に身を投じたらよいではないか。もし一官の職でも得て歸ってきて、名聲をあげたなら、三女にうっぷんを晴らさせたらいいではないか。生のセリフ 叔父上、私もそうしたいと思うのですが、いかんせん私には少しの路銀もないのです。外のセリフ 劉知遠、お前がもし行くというなら、私にとっておきの十兩があるから持って行きなさい。生のセリフ それならば、叔父上、お助けいただきありがとうございます。外のセリフ おまえがうちの三女に別れをいえば、私は歸るとしよう。生のセリフ 叔父上、私は行くには行きますが、家の中の三女には面倒をみるものがいなくなってしまいます。外のセリフ そのことは全て私が引き受けたよ。生のうた

10【桂枝香】叔父上おききください。わが訴えをお許しください。路銀に事缺く始末、どうしたらよいか判りません。きっと我が運命のつたなさ。きっと我が運命のつたなさ。身を誤るはめになってしまいました。今日よりは。恩人にお別れいたしますが、仇に對する恨みは消えようはずもありません。旦のうた

11【前腔】父母に先立たれてからは。ただ兄と兄嫁がいるばかり。どうして彼らは情愛に缺けた裏切りばかりで、私たち夫婦を引き裂くのでしょう。きっと我が運命のつたなさ。きっと我が運命のつたなさ。どうしたらよいか判りません。今日よりは。別れを無理強いされて、辛酸を嘗めることとなりましょう。外のうた

12【前腔】惱むでない。お前が路銀に事缺く始末とあらば、わしはどうしたものか。氣に病むでない、氣に病むでない、公明正大なお天道様が見ておられる。必ずや報いはあるもの。今日よりは。旅立って軍に身を投じ、氣をしっかりと持ち苦勞を厭うでない。

外のセリフ わしは歸るとしよう。お前たち夫婦は別れを惜しむがよい。あとから竇のじいさんに路銀を屆けさせるからな。こうなったのは、わしのせいでなければ子供たちのせいでもない。わしの兄は「事を起こすに根回しをおこたれば。災いが內輪におこる」というやつ。「鳳凰が梧桐の樹に降り立ちたとえ吉事が起こっても、他人はとかくあれこれいうもの」。退場

〔補註〕

前稿について、發表後以下のことに氣づいたので補足・修正する。

○「國正天心順……子孝父心寬」（五三頁）―成語。前半二句が元刊本『事林廣記』乙集卷上「人事類」「警世格言」「居官警語」の條に、後半二句が同書同卷「治家警語」の條にそれぞれ見えることを兪本の註がすでに指摘するほか、『張協狀元』第三四出、末の登場詩に前半二句が、『殺狗記』第三五出、末の登場詩に四句すべてが見える。

○「（香）〔鄉〕談」（五六頁）―胡竹安「廣陵刻印校補本《成化新編劉知遠還鄉白兎記》補正」（『中國語文』一九八四年第四期）は、『西湖老人繁盛錄』「瓦市」の條、『武林舊事』卷一〇下に「學鄉談」の語が見えることを指摘する。ここの「香談」は「鄉談」に校訂すべきであろう。

○「【（疎影）〔絳都春犯〕】」註（六二頁）―この曲は『增修箋註草堂詩餘』上卷所收の周邦彥【女冠子（同雲密布）】詞を參照していると考えられる。この詞は「冬雪」の分目に分類され、全文は以下の

通りである。「同雲密布。撒梨花、柳絮飛舞。樓臺誚似玉，向紅爐暖閣，院宇深庭，廣排筵會。聽笙歌猶未徹，漸覺輕寒，透簾穿戸。亂飄僧舍，密洒歌樓。酒帘如故。　想樵人、山徑迷蹤路。料漁人、收綸罷釣歸南浦。路無伴侶。見孤村寂寞，招颭酒旗斜處。南軒孤雁過，嚦嚦聲聲，又無書度。見臘梅枝上嫩蕋，兩兩三三微吐」。

○「結義十箇弟兄」（六三頁）―清・范寅『越諺』巻中「風俗」の條は「結拜十弟兄」の常語を擧げ、「此れ無賴の惡習なり。然れば唐の莊宗 終日沈飲し、俳優の輩と十弟兄を結ぶ。『春明退朝錄』に見ゆ」という。

○「相識滿天下知心有(已)(幾)人」註(同)―『五燈會元』巻一五「渾州雲蓋繼鵬禪師」に「相識滿天下、知心能幾人」とある。

○「獸炭」註(六四頁)―『晉書』巻九三「羊琇傳」に「琇 性豪侈にして、費用は復た齊限無し。而して屑炭を獸形に和(こ)ね作りて以て酒を溫むれば、洛下の豪貴 咸な競いて之れに效う」とある。

○「撮土焚香」註(七八頁)―宋・曹敏行『獨醒雜志』巻五に「土を捻りて香と爲すこと因有り、如今 假には宜しく、眞には宜しからず」とある。

○「濃眉毛……胡牙亂齒」註(八二頁)―『清平山堂話本』「簡帖和尚」に「官人」の容貌を描寫して「濃眉毛、大眼睛、蹶鼻子、略綽口」という。

○「萬事勸人休碌碌舉頭三尺有神靈」註(八三頁)―宋・王楙『野客叢書』巻二九「俗語有所自」の條は、「舉頭三尺有神明」を擧げ、南唐・徐鉉の語に見えることを指摘する。

○「【(遇帖)(過站)】」(八八頁)―成化本『白兎記』の後段、第二七葉bに【過站】の曲牌名が見え、ここにいう「遇帖」も「過站」の字形からくる誤りであろう。「過站」の「站」は、「賺」の發音からくる誤り。曲譜類に「過賺」の曲牌名は見えないが、「遇帖」を「過站」に校訂すべきである。

○「踏破鐵鞋無覓處算來全不用工夫」註(九五頁)―『宋詩紀事』巻九〇所引、夏元鼎「絕句」詩に「踏破鐵鞋無覓處、得來全不費功夫」とある。